

1985

鑄師屋遺跡群

鑄 師 屋 遺 跡

長野県佐久市小田井鑄師屋遺跡発掘調査報告書

昭和60年3月

長野県佐久市教育委員会



1. 鉤師屋遺跡群航空写真

例 言

- 1 本書は、昭和59年4月21日～昭和59年7月31日にわたって、発掘調査された、長野県佐久市大字小田井298番地他に所在する鑄師屋遺跡群鑄師屋遺跡の調査報告書である。
- 2 本調査は、東信土地改良事務所の委託を受け、佐久市教育委員会が実施し、農家負担分については国庫補助金事業として実施した。
- 3 本調査は、林幸彦・小山岳夫を担当者とし、佐久考古学会有志を調査員として、地元他多くの方々の協力を得て実施した。
- 4 本書に挿入した遺構の実測図作成には、小山・佐々木宗昭・堺益子・須藤久米子・橋詰勝子・井出百合子・原文子があたり、遺物の実測図作成は、小山・三石宗一・井出が担当した。また、遺構及び遺物のトレースは、堺・小井土節子が行った。掲載した写真は、小山が撮影した。また、原稿の執筆は、第三章を白倉が、他は小山・佐々木が行い、文責は文末に記した。
- 5 本書の編集は、小山が行い、林が校閲した。
- 6 本書の資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

また、調査にあたり下記の方々には適切な御指導・御協力を頂きました。記して厚くお礼申し上げます。(順不同、敬称略)

前原 豊、川島雅人、伊藤敏行、重田巻男、高村博文、臼田武正、堤 隆、諏訪間 順、諏訪間 伸、村田健二、平林将信、赤羽一郎、平野雅之、花岡 弘、鳥居 亮、山口慶一、丸山謙司、本橋宏巳、新井真博、小坂井孝修、鶴飼幸雄、守矢昌文、小島純一、福島邦男

凡 例

1 遺構の略称

H→奈良～平安時代住居址、M→溝状遺構、D→土塹

2 挿図の縮尺

1) 遺構

住居址、竪穴状遺構→1/80、カマド→1/30、井戸址、ピット群→1/40、土塹→1/60
全体図→1/600

2) 遺物

石製品→1/2→、土器→1/4

各挿図にはスケールを付し、縮尺を明示した。

3 挿図中におけるスクリーントーンは下記のをあらわす。

1) 遺構

点のスクリーントーン→焼土・カマド、住居断面→斜線のスクリーントーン

2) 遺物

点のスクリーントーン→須恵器断面

4 水系レベルは、760mが760.5mに統一した。

5 重複遺構については、上端のみを実線で表示した。また、遺構内における攪乱については、細い実線で上端のみを表示した。

6 写真図版の縮尺

石器→1/2、土器→1/4

7 写真図版中、本文中では遺物番号を簡略化した。例えば、第5図1は5-1と表わす。

8 出土土器一覧表の量目は上から口径、器高、底径の順に記載し、一不明、〈 〉現在値を示す。

9 遺構内における遺物は、すべてドットで表示した。

10 石器、石製品の実測は、第三角法を用いた。

本文目次

例言

凡例

本文目次

付表目次

挿図目次

I 発掘調査の経緯

1 調査に至る動機	1
2 発掘調査の概要	3
3 発掘調査日誌	3
4 発掘調査の方法	5

II 遺跡の位置と環境

1 鋤師屋遺跡付近の自然環境	6
2 遺跡の歴史的環境	8

III 層序

11

IV 遺構と遺物

1 住居址	12
1) H 1号住居址	12
2) H 2号住居址	16
3) H 3号住居址	20
4) H 4号住居址	22
2 竪穴状遺構	
1) 第1号竪穴状遺構	24
2) 第2号竪穴状遺構	24
3) 第3号竪穴状遺構	26
4) 第4号竪穴状遺構	28
5) 第6号竪穴状遺構	29
6) 第7号竪穴状遺構	31
7) 第8号竪穴状遺構	32

3	溝状遺構	34
4	井戸址・土壌・ピット群・風倒木址	36
5	グリッド及び表採遺物について	49
V	総括	49
1	遺構	49
2	遺物	53
	引用参考文献	53

付 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表〈1〉	8
第2表	周辺遺跡一覧表〈2〉	9
第3表	H1号住居址出土土器一覧表	15
第4表	H2号住居址出土土器一覧表	20
第5表	H3号住居址出土土器一覧表	21
第6表	H4号住居址出土土器一覧表	23
第7表	第3号竪穴状遺構出土土器一覧表	27
第8表	第6号竪穴状遺構出土土器一覧表	30
第9表	第7号竪穴状遺構出土土器一覧表	32
第10表	土壌一覧表〈1〉	41
第11表	土壌一覧表〈2〉	42
第12表	土壌一覧表〈3〉	45
第13表	土壌一覧表〈4〉	46
第14表	第1号井戸址・18号土壌出土土器一覧表	47
第15表	住居址一覧表	50

挿 図 目 次

第1図	鋳師屋遺跡の位置図及びトレンチ設定図	1
第2図	鋳師屋遺跡トレンチ設定図	2
第3図	鋳師屋遺跡の地形・地質	7
第4図	周辺遺跡分布図	10

第5図	層序模式図	11
第6図	H1号住居址実測図	13
第7図	H1号住居址カマド実測図	13
第8図	H1号住居址遺物分布図及び接合関係図	14
第9図	H1号住居址出土土器実測図	15
第10図	H2号住居址実測図	16
第11図	H2号住居址カマド実測図	17
第12図	H2号住居址遺物分布図及び接合関係図	18
第13図	H2号住居址出土土器実測図	19
第14図	H3号住居址・D15号土壌実測図及び遺物分布図	21
第15図	H3号住居址出土土器実測図	21
第16図	H4号住居址実測図及び遺物分布図	22
第17図	H4号住居址カマド実測図	22
第18図	H4号住居址出土土器実測図	23
第19図	第1・2号竪穴状遺構実測図	24
第20図	第3号竪穴状遺構実測図及び遺物分布図	27
第21図	第3号竪穴状遺構出土土器実測図	27
第22図	第3号竪穴状遺構出土土器実測図	27
第23図	第4号竪穴状遺構・D32号土壌実測図	28
第24図	第6号竪穴状遺構・第2号井戸址実測図及び遺物分布図	29
第25図	第6号竪穴状遺構出土土器実測図	30
第26図	第7号竪穴状遺構・D89号土壌実測図及び遺物分布図	31
第27図	第7号竪穴状遺構出土土器実測図	32
第28図	第8号竪穴状遺構・D90号土壌実測図	33
第29図	M1号溝状遺構・D21-27・29・30号土壌実測図	34
第30図	M2号溝状遺構・D40号土壌実測図	35
第31図	第1号井戸址実測図及び礫群分布図	36
第32図	第1号井戸址木材・土器分布図	37
第33図	D1~D4号土壌実測図	38
第34図	D5~D20・28・31号土壌実測図	39
第35図	D33~D39・41~53号土壌実測図	40
第36図	D54~D56・60・62~69号土壌実測図	43

第37図	D57~D59・61・70~85号土壌実測図	44
第38図	D86~D88号土壌実測図	46
第39図	D18号土壌出土土器実測図	46
第40図	ビット群 (P ₁ ~P ₇) 実測図	47
第41図	第1~4号風倒木址実測図	48
第42図	遺跡全体図	51~52

図 版 目 次

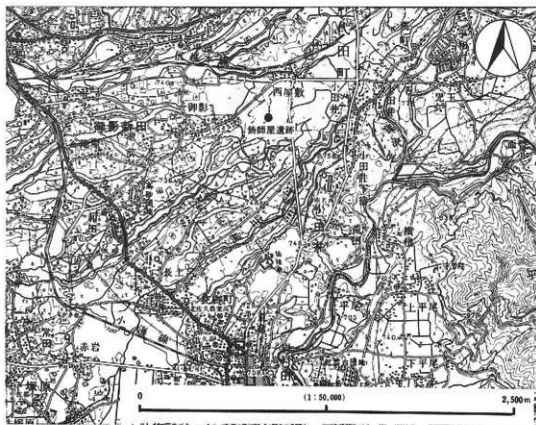
口絵	鋳師屋遺跡群航空写真	図版 十	1 第6号竪穴状遺構・第2号井戸址
図版 一	鋳師屋遺跡の位置		2 第3号竪穴状遺構出土石器
図版 二	1 H1号住居址遺物出土状態		3 第6号竪穴状遺構出土土器
	2 H1号住居址 (南方から)		4 第7号竪穴状遺構出土土器
図版 三	1 H1号住居址カマド	図版 十一	1 第7号竪穴状遺構
	2~5 H1号址出土土器		2 第8号竪穴状遺構
図版 四	1 H2号住居址遺物出土状態	図版 十二	1 M1号溝状遺構
	2 H2号住居址 (南方より)		2~3 M2号溝状遺構
図版 五	1 H2号住居址カマド		4~6 第1号井戸址
	2~3 H2号住居址出土土器	図版 十三	1~5、D1~D4、D5・7・9、D8、D10、D11号土壌
	4 調査スナップ	図版 十四	1~8、D16~19、D31、D33、D34、D36、D38、D39号土壌
図版 六	1 H3号住居址 (西方より)	図版 十五	1~8、D40~48、D60号土壌
	2 H4号住居址 (北方より)	図版 十六	1~8、D62~68、D72・73、D89、ビット群 (P ₁ ~P ₇)
図版 七	1 H4号住居址カマド	図版 十七	1~4、第1・2号風倒木址
	2 H4号住居址遺物出土状態		
	3~5 H4号住居址出土土器		
図版 八	1 第1号竪穴状遺構 (南方より)		
	2 第2号竪穴状遺構 (南方より)		
図版 九	1 第3号竪穴状遺構		
	2 第4号竪穴状遺構		

I 発掘調査の経緯

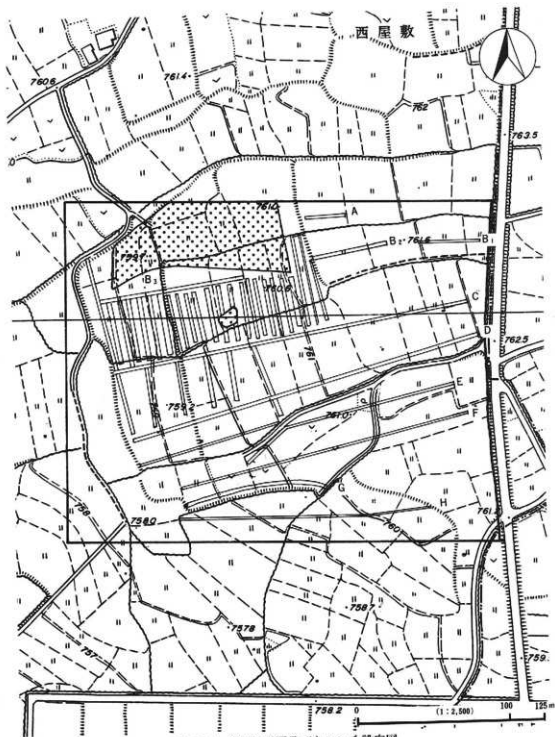
I 発掘調査に至る動機

鋳師屋遺跡は、佐久市の北端部小田井地籍の標高760m内外の微高地上に存在する。同遺跡群中には、御代田町の野火付遺跡があり、また、近隣に、小諸市宮ノ反遺跡、曾根城遺跡など古墳時代後期～奈良・平安時代の遺跡が群在している。

本遺跡は、東信土地改良事務所による昭和59年度県管ほ場整備事業に際して、破壊を余儀なくされる事態となり、緊急に発掘調査し、記録保存することとなった。(事務局)



第1図 鋳師屋遺跡の位置



第2図 遺跡位置図及びトレンチ設定図

2 発掘調査の概要

遺跡名 鋳師屋遺跡群鋳師屋遺跡
所在地 長野県佐久市大字小田井298番地他
発掘期間 昭和59年4月21日～昭和59年7月31日
整理期間 昭和60年1月4日～昭和60年3月31日

調査団の構成

(事務局)

教育長 大井昭二
教育次長 森泉郁太郎
社会教育課長 並木 進
社会教育係長 相沢幸雄
社会教育係 関本 功、林 幸彦、細萱健一
社会教育指導員 森泉かよ子
社会教育課臨職 三石宗一(昭和59年7月就任)、小山岳夫(昭和59年7月就任)

(調査団)

団 長 藤沢平治
調査担当 林 幸彦、小山岳夫
調査員 井上行雄、大井今朝太、佐々木宗昭、島田恵子、白倉盛男、森泉かよ子、森泉定勝、三石宗一(以上佐久考古学会員)
協力者 並木ことも、丸山勝子、遠藤しづか、須藤久米子、大井恵美子、井出百合子、堺益子、池田美智子、神部妙子、早川俊彦、橋詰勝子、橋詰信子、田中夏江、原文子、木下弘江、石井淳子、大井和子、小井戸節子、高橋純子、御園孝子、吉田ゆかり、津島みゆき、佐々木春藏、依田さき子、森泉泰和(一橋大学学生)、長沼隆年(東京経済大学学生)

3 発掘調査日誌

- 昭和59年4月21日
遺跡内で表面採集を行い、遺構集中箇所の確認を行う。
- 4月22日
調査員の間で、調査の方法、人員配置などの話し合いを行う。
- 4月23日～30日

プレハブ及び一部の器材の搬入を行った後、南側の微高地にG・Fトレンチを設定。人力によって、掘り下げ、確認面の決定、遺構の確認作業を行う。また、北側微高地の試掘ピット掘り下げも行う。室内では器材の手入れを行う。

○5月17日～21日

重機を搬入し、本格的なトレンチの掘り下げを開始する。また、人力でトレンチ内の精査、遺構の確認作業を行う。その結果、南側微高地には遺構の存在が認められず、調査を断念し、北側微高地の住居址プランが確認された箇所の周辺を集中的に調査することに決定した。

○5月22日～31日

重機によって北側微高地の表土除去作業を行う。それに伴って遺構確認作業を行った結果、住居址3軒、竪穴状遺構6基、土壇90余基、溝状遺構2基を確認した。また、グリッドの設定を行い、土壇群の掘り下げ、セクション図、平面図の作成、写真撮影も開始する。室内では、遺物整理、概念図の作成作業を開始する。

○6月1日～3日

第4号竪穴状遺構、土壇群の調査を行う。室内では遺物整理作業を行う。

○6月4日～6日

重機による拡張作業再開。1・2・4号竪穴状遺構、M1・2号溝状遺構、土壇群の調査を行う。D33（井戸址）は湧水が激しくポンプを導入。室内では遺物整理を行う。

○6月7日

重機を遺跡存在地の南部に移し、緻密なトレンチ確認を行う。その結果、竪穴状遺構2基が確認された。重機による作業は本日で終了する。遺構調査は、H2・3号住居址、第1・4号竪穴状遺構等を行い、室内作業は、図面整理を行った。

○6月8日～12日

1・2・3号竪穴状遺構、H3号住居址の調査を行う。

○6月13日

雨のため、図面整理及びナンバー遺物のチェックを行う。

○6月14日～28日

H1・2・3・4号住居址、第3・5・6号竪穴状遺構、井戸址2、土壇群の調査を行う。6月21日からは雨期に入ったため、現場は水びたしの状況となり、調査は難航する。

○6月29日・30日

雨のため、遺物・図面の整理を行う。発掘現場は湧水が非常に激しく、作業は一時中断を余儀なくされた。

○7月4日～7日

発掘作業再開。第7・8号竪穴状遺構、土壌群の調査を行い、完掘する。遺跡の全面を精査して、写真撮影を行って発掘作業を終了した。

○7月30日・31日

プレハブの解体・器材の撤収を行う。

○整理作業 水洗い及び註記は、発掘期間中に併行して行いほぼ終了した。

○昭和60年1月～3月

遺物復元作業、実測、トレス、遺構の図面修正、トレス、原稿執筆の後、編集作業を行い報告書刊行のはこびとなる。

4 発掘調査の方法

本遺跡の調査を実施するにあたって、基本的な調査方法を次のような確認事項をもって実施した。

1 調査はグリッド方式で行う。発掘区全体を3m×3mの方眼に組み、南北ラインを数列とし、北から1・2・3……、東西ラインは西からあ・い・う……の順で番号をつけ、各グリッドの西北交点をそのグリッド名とした。

2 遺構内の遺物の位置は、原則としてすべてを記録する。また、実測図においては、遺物をすべて●で表示する。

3 ビット及び、カマドの調査は、原則として全て半載する。

(小山岳夫)

II 遺跡の位置と環境

1 鑄師屋付近の自然環境（地形・地質を中心として）

上信国境にまたがっている上信越高原国立公園の最南端に聳え立つ三重式コニーデ火山浅間山(2560m)は、現在も活発な火山活動を続けている。この浅間山の頂上から真南にかけて急傾斜面一緩傾斜山麓地帯—裾野平地(標高750m)に展開するのが御代田町及び佐久市小田井地区である。東南方向には、独立した森泉山(1435.9m)、平尾富士(1127m)の塊状火山の構成する旧佐賀地区の山地が続いている。

浅間山は我が国で最も若い火山で、侵蝕開析の進んでいない幼年期地形を示しており、第一火口原より発源する蛇堀川、標高1500m血の池から流れ出す濁川、軽井沢町地区千ヶ滝から流出している濁川は何れも真直に南下しており、山裾900m以下には古くから拓かれた御影用水・湧玉用水が発達し、水利の便に恵まれ水田灌溉に活用されて、その末端は西に向きを変えて千曲川に流入している。鑄師屋遺跡群鑄師屋遺跡はこの裾野平地(標高760m内外)の水田地帯の中心部に位置している。

浅間火山第一次の黒斑火山は噴火口の東西径3kmに及ぶ大火山で噴火口壁は蛇ヶ岳・黒斑山・牙山・剣ヶ峯と続く輝石安山岩・凝灰角礫岩から成る最初の溶岩流によって構成され、蛇堀源流と長坂の二大爆裂火口によって断ち切られているが、その時の大熱泥流は佐久市中佐都郡付近まで及んで原流れ山群を形成している(黒斑溶岩⑦)。その上に流出した黒斑溶岩はかんらん石輝石安山岩で標高1200m付近まで山腹を被っている(黒斑溶岩⑧)。1200mより下部裾野一帯、西は小諸市懐古園付近、東は軽井沢町寄掛付近まで、南は佐久市中込原まで浅間火山噴出物中最広範囲に分布する火山灰砂軽石流で、これは二期に分けられているが第一次の上に第二次のものは、馬瀬口以西に上部に重なり分布している。この軽石流地域は雨水流水の侵蝕力に誠に弱く新期火山麓特有の大小の田切地形がよく発達し、南部では西南方向に、西部では西方向の見事な10~15mの垂直断崖を作っている。その谷底が原初の自然流路となっており弥生水田の拓かれた所であろうと考えられている。鑄師屋遺跡はこの地層の上に立地している。この軽石流斜面標高900m内外に縄文時代前中期の遺跡が多く知られている。

第二次前掛火山は火口中心が東に移動し、東西径約1kmに縮小したもので火口壁は西側に僅かに認められるが昭和初期までは無限の谷と呼ばれた深い谷があり夏になっても雪氷が残っていたものである。東側は僅かに盛り上っていて東前掛と称されているが噴出物に被われていて明瞭

ではない。この噴火口からの噴出物が追分火砕流で軽石流の上に古い岩石片や火山砂礫と共にバン皮状火山弾の大きささまざまなものを多量に含み追分原から見玉東方まで厚く分布している。この火山弾は丸味を帯びた割れ目が見られる異様な形態のものも浅間焼石と称されて庭作り石垣などに利用されている。前掛火口の中に更に東寄りに径310~350mの現中央火口丘釜山が形成されたのは1783年天明3年の大噴火鬼押し以来と言われておりその後も噴火火砕流の流出に供って釜山自身高さを増しているようである。浅間山は爆発的噴火を繰り返し、その噴出物は西は湯の平、東南は1400m等高線付近まで厚く堆積しており、大噴火の際の火山灰は遠く東京・銚子付近まで降灰することもあるのは、上空成層圏の偏西風によるものと考えられている。

佐久市小田井の地形地質を考察するには浅間火山の活動と密接な関係があり、切り離すことはできない。鑄師屋遺跡は黒斑火山の軽石流堆積層上に立地している訳でその層序構成については次章で述べることとする。

(白倉盛男)



第3図 鑄師屋遺跡の地形地質図(1:25,000)

2. 遺跡の歴史的環境

鋤師屋遺跡は、濁川流路北岸の微高地上に位置している。この流路の南北両岸に沿う、細長い田切り地形の台地上には、近津・周防畑・曾根城・芝宮・長土呂・栗毛坂・枇杷坂等、広大で密度の濃い、弥生・古墳・奈良・平安時代の連続とした集落遺跡が存在する。鋤師屋遺跡は、この超遺跡過密地帯から若干離れ、御代田町に近接した佐久市の北端部、標高760m内外の小田井地区に存在している。この周辺地域での調査例は、市内の下前田原古墳と小諸市野火付古墳、集落址では小諸市から佐久市にまたがる曾根城遺跡は奈良時代を中心とする住居址群が知られる程度で、その実態は、ペールに包まれている部分が多かった。しかし本年度から、本遺跡をはじめ、同遺跡群中の野火付遺跡や、小諸市の宮ノ反遺跡など、県営ほ場整備事業に伴って古墳～平安時代の集落址の存在が予想される遺跡の大規模な発掘調査が増加するため当地域の遺跡の様相はかなり明確化されると考えられる。また本遺跡の近辺は古代小沼・長倉といい、古東山道途上にあたり、長倉牧址や塩野牧址などの古代御牧の存在が視察される地域である。このため、本調査でもこれらの古代御牧に関連する遺構・遺物の検出が期待された。

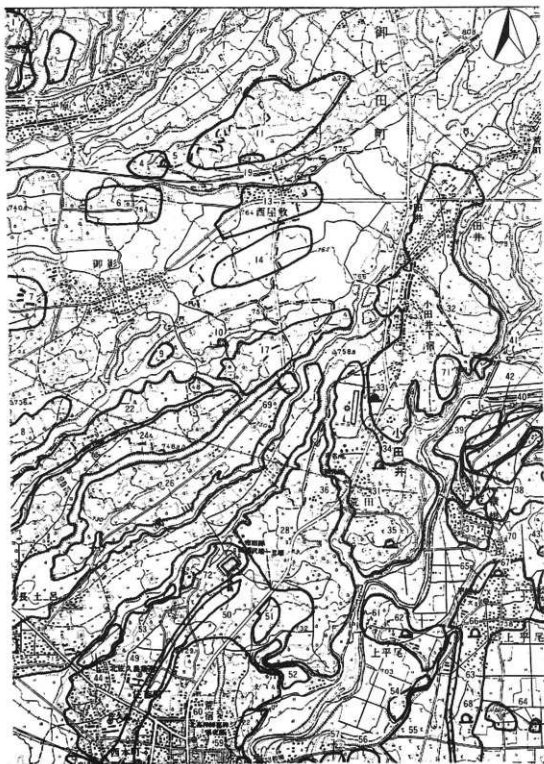
1 土屋長久 1970 「信濃長倉牧址にある上代牧場遺構」(『長野県考古学会誌』第9号)

第1表 周辺遺跡一覧表<1>

No.	位分No.	遺 跡 名	所 在 地	立 地	時 代				備 考
					種 別	弥 生	古 墳	歴 史	
1		星合遺跡	小諸市平原	微高地	○				
2		平原城址	小諸市平原	#				○	
3		北原遺跡	小諸市平原	#	○				
4		長野原遺跡	小諸市平原	#				○	
5		長野原古墳	小諸市平原	#				○	
6		宮ノ反遺跡	小諸市御影	#	○			○	
7		池ノ上遺跡	小諸市御影	#	○	○		○	
8		和田原遺跡	小諸市和田	#		○		○	
9		野火付遺跡	小諸市御影	#				○	
10		野火付古墳	小諸市御影	#				○	
11	1	下前田原遺跡群	佐久市小田井後原	#	○			○	昭和58年度発掘調査
12	1-1	後原遺跡	佐久市小田井後原	#	○				昭和57年度発掘調査
13	2	前田遺跡群	佐久市小田井前田	#		○	○	○	
14	3	鋤師屋遺跡群	佐久市小田井鋤師屋	#	○	○	○	○	
15	3-1	鋤師屋遺跡	佐久市小田井鋤師屋	#	○	○		○	本調査
16	3-2	野火付遺跡	御代田町	#		○		○	昭和59年度発掘調査
17	4	曾根城遺跡	小諸市御影新田	#	○	○	○	○	
18			佐久市小田井曾根城	#	○	○	○	○	
19	5	下前田原古墳群	佐久市小田井後原	#				○	昭和47年度発掘調査
20	5-1	後原1号墳	佐久市小田井後原	#				○	昭和47年度発掘調査
21	5-2	後原2号墳	佐久市小田井後原	#				○	昭和47年度発掘調査
22	6	近津遺跡群	佐久市長土呂近津	#		○	○	○	
23	6-1	北近津遺跡	佐久市長土呂北近津	#		○	○	○	昭和46年度発掘調査

第2表 周辺遺跡一覧表<2>

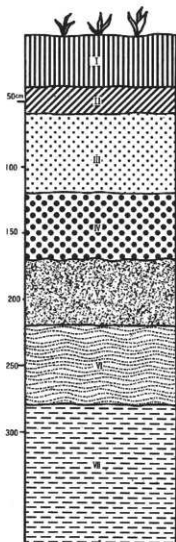
No.	区分No.	遺跡名	所在地	立地	時代			備考
					縄文	古墳	歴史	
24	7	周防雄遺跡群	佐久市長土呂	微高地	○	○	○	
25	7-1	周防雄A遺跡	佐久市長土呂廻功畑	#	○			昭和54年度発掘調査
26	8	芝宮遺跡群	佐久市岩村田芝宮	#		○	○	昭和54-55-57年度発掘調査
27	9	長土呂遺跡群	佐久市長土呂	#	○	○	○	
28	10	栗毛坂遺跡群	佐久市岩村栗毛坂	#	○	○	○	
29	10-1	柳田遺跡	佐久市岩村柳田	#	○			昭和58年度発掘調査
30	10-2	前原部遺跡	佐久市岩村田	#			○	昭和59年度立ち合い調査
31	11	鈴板遺跡群	佐久市小田井	#		○	○	
32	12	中金井遺跡群	佐久市小田井	#		○	○	
33	13	皎月古墳	佐久市小田井皎月	#				昭和45年度発掘調査
34	14	鳥取古墳	佐久市小田井	#			○	
35	15	からむし古墳	佐久市横根	#		○		
36	16	船運澤萬一塚	佐久市岩村田	#			○	
37	17	延寿城遺跡群	佐久市横根	#			○	
38	18	上の懸遺跡	佐久市横根	#	○	○	○	
39	19	芋の壑遺跡	佐久市横根	#	○	○	○	
40	20	上長坂遺跡	佐久市横根	#	○	○	○	
41	21	唄坂遺跡	佐久市小田井唄坂	低地	○	○	○	
42	22	横根1～28号城	佐久市横根	微高地			○	
43	23	矢口古墳群	佐久市横根矢口	#			○	
44	38	下瀬沢遺跡	佐久市長土呂下瀬沢	低地		○	○	
45	39	円正防遺跡群	佐久市岩村田	微高地	○	○	○	
46	39-1	清水田遺跡	佐久市岩村田清水田	#		○	○	昭和53年度発掘調査
47	39-2	円正防遺跡	佐久市岩村田	#		○	○	昭和59年度発掘調査
48	40	長土呂館跡	佐久市長土呂	微高地			○	
49	41	枇杷坂遺跡群	佐久市岩村田	#		○	○	
50	42	中久保田遺跡	佐久市岩村田	低地		○	○	
51	43	西赤塚遺跡	佐久市岩村田	微高地		○	○	
52	44	上岩子遺跡	佐久市岩村田	低地			○	
53	45	新城遺跡	佐久市岩村田	#		○	○	
54	46	腰巻遺跡	佐久市平尾	#		○	○	
55	47	西大久保遺跡群	佐久市上平尾	微高地	○	○	○	
56	48	饒敷遺跡	佐久市安原	#			○	
57	49	上小平遺跡	佐久市岩村田	#			○	
58	50	下小平遺跡	佐久市岩村田	河岸段丘		○	○	
59	51	大井城跡	佐久市岩村田	台地		○	○	
60	52	岩村田遺跡群	佐久市岩村田	微高地		○	○	
61	53	濱石遺跡	佐久市上平尾	河岸段丘		○	○	
62	54	濱石古墳	佐久市上平尾	#			○	
63	56	東大久保遺跡	佐久市上平尾・下平尾	微高地	○	○	○	
64	59	宮前遺跡	佐久市下平尾	#			○	
65	67	白岩城遺跡	佐久市上平尾	台地			○	
66	71	糠畑古墳	佐久市上平尾	微高地			○	
67	72	前古墳	佐久市上平尾	#			○	
68	73	宮の西古墳	佐久市下平尾	#			○	
69	538	曾根城跡	佐久市小田井	#			○	
70	539	延寿城跡	佐久市横根	台地			○	
71	540	金井城跡	佐久市小田井	#			○	
72	541	曾根新城跡	佐久市岩村田	#			○	



第4図 周辺遺跡分布図(1:25,000)

III 層 序

鉢師屋遺跡の地質・地盤は、浅間火山第一期の黒斑火山の噴出物、火山灰砂軽石流の堆積地で、最新の火山噴出物のため風化分解が進まず、堆積したままの状態でごく不完全な層状になっていない。遺跡の発掘区南東部より抽出した基本層序は、第5図の通りである。



第5図 層序模式図

軽石流の絶的な層厚は付近の田切り断崖での観察によれば場所により多少の変化はあるが、10m内外に達している。今回の断面図第5図はその上部に当り、この軽石流は数回に亘り流出を繰り返したもので、深さ130cmと270cm付近に時間的空隙とみられる僅かな不整合がみられ、下部になると火山灰が地下水に分解されてローム化が進み、滞水層となってその上部に地下水をたたえていることが認められる。これは第一軽石流と称されて、浅間山麓に最大の拡がりをもつ本質火山岩礫が極めて少ない軽石と火山灰を主体とした堆積層浅間火山初期に相当長期に亘り堆積をくり返していたものである。

(層序説明)

- 第I層 耕作土 粘性は弱い。
- 第II層 黒褐色土 微高地には薄く、低湿地には厚く堆積し、遺構覆土を形成する。
- 第III層 黄褐色土 火山砂火山灰。本遺跡の遺構確認面である。
- 第IV層 含浮石礫火山灰流 鉄鉋層沈澱
- 第V層 不整合火山灰(滞水層) 粘質ローム化
- 第VI層 灰褐色土 粗砂灰(火山性水中堆積)
- 第VII層 灰褐色土 火山灰のみ。

(白倉盛男)

IV 遺構と遺物

I 住居址

1) H1号住居址

遺構（第6・7図、図版三の2、四の1）

本住居址は、発掘区の西側中央部、く・けー7・8グリッド内に位置し、全体層序第III層上において単独で検出された。東側3m程離れた地点にH2号住居址が存在している。

平面形態は南北290cm、東西350cmのやや不整な長方形を呈している。カマドを中心とした軸方向は、ほぼ、真北を示している。

覆土は、径5mm前後のバミスを少量、径0.5~1cmの砂粒を多量に含む黒褐色土の1層のみで構成されている。

確認面からの壁高は、4~14cmを測り、東から西に向って徐々にレベルが低下し、特に西壁の残存状況は不良と言える。壁体は、黄褐色ローム層を利用し、割合堅固であるが、平滑とは言えない構築状況である。床面からは北壁から東壁の北半にかけてはほぼ垂直に、西壁から東壁の南半部にかけては緩い傾斜で立ち上がる。

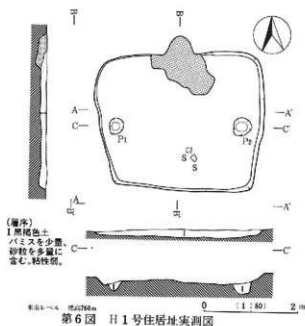
壁溝は、検出されなかった。

床面は、黄褐色ローム層上に黒褐色土と極細かい砂粒を混ぜた土を薄く叩きしめて構築されるが、やや軟弱で、崩壊し易い状態であった。また、西壁下と南東コーナー部の床面は、他に比べて若干、レベルを低下させている。

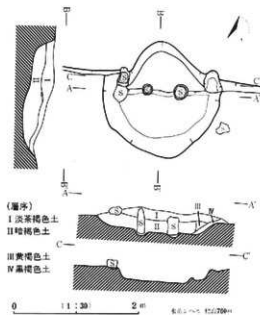
ピットは、東西両壁の中央部直下から各1個ずつ検出された。いずれも主柱穴と考えられる。P₁は、33×31cmの円形を呈し、深さは21cmを測る。断面形は、U字形を呈する。P₂は38×37cmの円形を呈し、深さは22cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。その他、本住居址に伴うと考えられるピットは、住居内、壁外からは検出されなかった。

カマド

カマドは、北壁の中央にあり、壁体を掘り込んで構築されている。焚口~煙道部までの長さは100cm、幅は95cmを測る。残存状態は不良である。煙道部は北壁体の中央部を南北42cm×東西59cmの三角形状に、緩い傾斜で掘り込んで構築し、その直下の床面を、東西92cm、南北53cmの半円形に掘り窪めて、燃焼部を形成している。また、燃焼部と煙道部の境には、一段のテラスがあ



第6図 H1号住居址実測図



第7図 H1号住居址カマド実測図

り、そのテラス部にビットを2コ穿った後、方柱状に面取りした軽石を、それぞれに各1個ずつ差し込んで、支脚としている。袖部は左袖部の補強材に使用されたと考えられる礫が、ビット内に埋め込まれる状態で2個検出された。右袖部にも同様のビットがみられるため、構築当時は、両袖に各2個ずつ石材が、使用されていたと推察できる。

カマド内の覆土は4層に分割されたが、往時の構築状態を示すものではない。第1層は、粘土を含有する淡茶褐色土であり、本址のカマドの

構材に使用された土と考えられる。第II～IV層は、いずれもローム粒を含有し、これらの土も、カマドの構材に何らかの関わりがあったものと推察できる。

尚、本址のカマドは、いずれの箇所にも焼土が認められず、長期にわたって使用された痕跡はみられない。

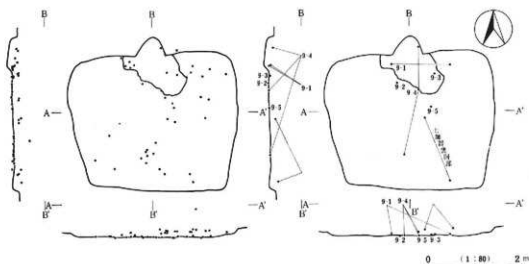
遺物の出土状態（第8図、図版三の1）

本住居址の壁残高は、非常に低く、覆土も単層であるので、分布の傾向は、第I層内及び床面上出土のすべての遺物を一括して検討することにした。

遺物は非常に少なく、総数で42点出土した。内訳は、土師器29点、須恵器13点で、土師器の割合が高い。

分布状況は、カマド内及びカマド周辺、

住居址内の南西部に散漫に分布する傾向が指摘される。また、住居内の北西部には全く遺物がみられず、壁ぎわにおいても遺物は、極めて少ない。接合関係からは9-4に代表されるように、



第8図 H1号住居址遺物分布図及び接合関係図

比較的住居址内の広範囲にわたって、同一個体の破片が散乱している状態が看取される。

以上、本住居址の出土遺物は、本址の機能時に使用されたものとは考え難い出土状況を示し、投棄された可能性が強いものと判断したい。

遺物（第9図、図版四の2～5）

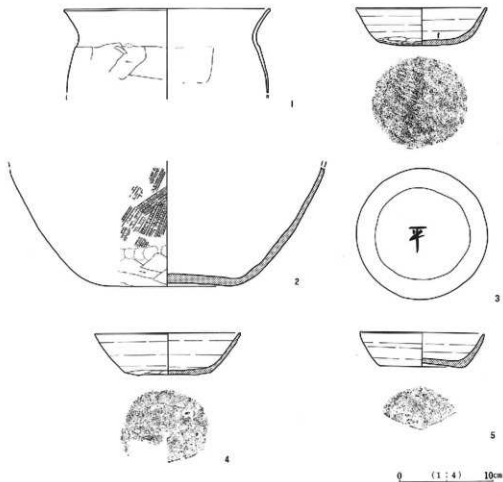
本住居址で図化し得た遺物は、土師器1点、須恵器4点である。

土師器の器種には甕がある。甕（9-1）は、器厚の薄い長胴甕で、最大径は口辺部に有するものの、胴部の最大径と大差はない。口辺部から胴部にかけては、やや外反する。外面調整は、胴部の上部に横位のヘラケズリが施される。

須恵器の器種には、甕、坏がある。甕（9-2）は胴下部～底部の大型破片で、外面に格子目叩きが施される。坏（9-3～4）は、いずれもクロコロナデ調整が施されるが、底部全面に手持ちヘラケズリが加えられる3・4と、回転糸切りの後、周辺部にヘラケズリが施される5がみられる。器形的にも口辺部が外反気味になる3、内湾気味の4、内湾する5とそれぞれ微妙な相違がみられる。また、9-3の底部には「平」と読みとれる墨書がみられる。

以上、本住居址の出土遺物は、奈良時代後半～平安時代初頭に比定されるものと考えられる。

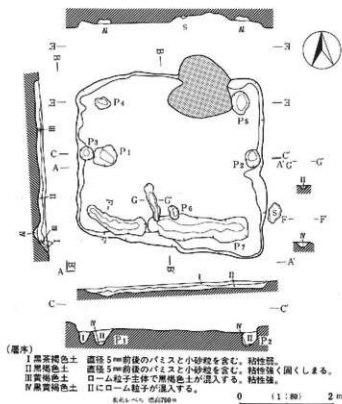
（小山岳夫）



第9図 H1号住居址出土土器実測図

第3表 H1住居址出土土器一覧表

発掘 番号	器種	量量	器形の特徴	裏	底	備考
9-1	土器 鉢	22.0 (8.9)	最大径は口辺部にあり、口辺部はゆるく外反し、肩部で急に肥厚する。胴部は軽く膨らむ。器厚は、極めて薄い。	外面 口辺部ヨコナデの後、胴部上段は横方向のヘラケズリが施される。 内面 口辺部ヨコナデ胴部ヘラケズリの後、ナデ。		煤付着 沼転実測 No.6、13、45
9-2	須恵 器 鉢	15.0 (12.0)	底部は平底を呈し、胴部内径のみに外傾する。	外面 胴部は格子目叩きが施される。 内面 ナデが施される。		沼転実測 No.18
9-3	須恵 器 鉢	13.8 4.0	ほぼ定形、口辺部僅かに外反して外傾する。	内外面 ロクロヨコナデが施される。 底部は手持ちヘラケズリが施される。		完全実測書「平」 No.10
9-4	須恵 器 鉢	15.2 4.4 (9.2)	口辺部あまり開かず、やや内湾気味に外傾する。底部はやや丸味を呈する。	内外面 右回転ロクロヨコナデ。 底部は丁傘を手持ちヘラケズリ。		火手痕あり
9-5	須恵 器 鉢	13.0 3.6 9.0	口辺部は内湾気味に小さく外傾する。底部平底。	内外面 左回転ロクロヨコナデが施される。 底部 は回転糸切りの後、筒後部ヘラケズリ。		自然物付着 沼転実測 No.22



第10図 H2号住居実測図

2) H2号住居址

遺構(第10・11図、図版五の2、六の1)

本住居址は、発掘区の西側中央部こ・さ-8・9グリッド内に位置し、全体層序第III層上において単独で検出された。西側にはH1号住居址が存在している。

平面形態は、南北362cm、東西392cmのやや形の崩れた方形を呈している。カマドを中心とした主軸方向は、N-2'-Wを示している。

覆土は、大きく2層に分割された。第I層は、バミスと小砂粒を含む黒茶褐色土であり、第II層は、I層にくらべ

色調がやや暗く、固くしまる黒褐色土である。また、南壁下には、壁体の崩落と考えられるローム粒子主体の黄褐色土が観察された。

確認面からの壁高は、4~17cmを測り、北から南へ向ってレベルを低下させている。壁体は、黄褐色ローム層を利用し、割合堅固であるが平滑とは言えない構築状況である。床面からは、一様に急な傾斜で立ち上がる。

壁溝は、南壁下から検出されている。溝幅は25~57cm、深さは6~16cmを測る。南壁の中央西寄りで一箇所断絶し、全体的には蛇行の多い、不規則な掘り込みとなっている。覆土は、ローム粒が混入する、第IV層が認められ、人為的に埋めもどされた可能性が強いものと判断される。また、この溝の中央部から「L」字状に折れ曲って住居中央に向う、全長87cm、幅14~20cm、深さ8cm前後の小規模な掘り込みも認められた。この小規模な掘り込みの覆土は第II層である。

床面は、黄褐色ローム層上に、黒褐色土と極細かい砂粒を混ぜた土を薄く叩きしめて構築されている。ほぼ平坦ではあるが軟弱な構築状況と言える。

ピットは、6個検出されている。主柱穴と考えられるのは、P₁~P₃で、東壁下の中央部の床面

よって構築される第II、III層が、カマドの構築材となっていた可能性が高い。また、カマド内に分布する焼石も袖石等に利用されたものと考えられる。

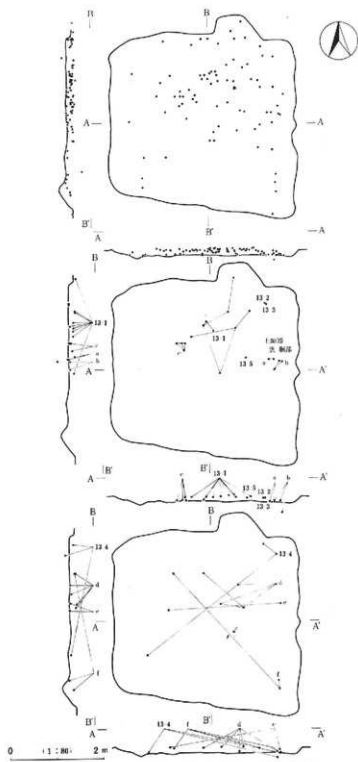
遺物の出土状態（第12図、図版五の1）

遺物は総数で79点出土した。内訳は、土師器69点、須恵器10点で土師器の割合が9割近いが、細片が極めて多く、完存品はみられない。

平面分布からは、住居の中央部から北側、特にカマド側にかけて遺物が集中するのに対して、南側は極めて散漫になることが看取できる。

垂直分布からは、第I層中あるいは第II層の直上に遺物が集中し、第II層中や、床面上では、割合遺物が少なくなる傾向がみられる。

また、接合関係図からは、13-1、接合資



第12図 H2号住居址遺物分布図及び接合関係図

料C・Dのように、第I層中から、第II層や床面上にまでわたる遺物の接合関係がみられる。従って遺物の接合関係が土層の堆積状態と一致しているとは言い難い。以上から本住居址の出土遺物は、層位的に分離して考えることは困難であり、とりえず一括して取り扱って大過ないものとする。

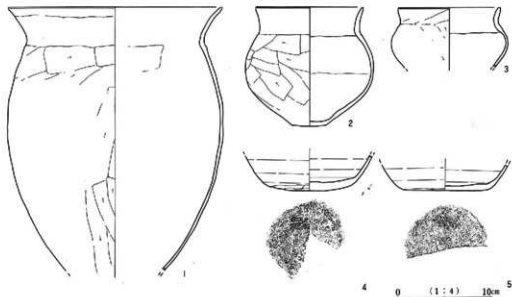
遺物（第13図、図版六の2・3）

本住居址から出土した遺物で図化し得たものは、土師器3点、須恵器2点である。

土師器の器種には、甕、小形甕がある。甕（13-1）は、最大径を胴部中位と口辺部に有する長胴甕である。外面調整は胴部の上位に横方向の、中・下位には縦・斜方向のヘラケズリが施される。小型甕は、最大径を胴部の中位に有して、口辺部が緩く開く13-2と、13-2よりもやや小形で、胴部がそろばん玉状を呈する13-3がある。外面調整は、いずれも胴部に斜位のヘラケズリが施される。

須恵器の器種には、坏がある。坏（13-4・5）はいずれも底部破片であって全器形は知り得ない。外面調整は4・5ともロクロヨコナデ調整が施され、底部には、手持ちの丁寧なヘラケズリが施される。

以上、出土遺物には、須恵器坏に奈良時代的な特徴がみられることから、本住居址の所産期もそれに近い時期と考えておきたい。
（小山岳夫）



第13図 H2号住居址出土土器実測図

第4表 H2号住居址出土土器一覧表

神保 番号	器種	法量	器形の特徴	調	整	備	考
13-1	土師 器鉢	(22.6) (28.6)	最大径は口辺部と胴中段にあり 口辺部はやや強く外反し、胴部 は丸味を帯びる。	外面 内面	口辺部ヨコナデの後、胴部上位に東方向のヘラ ケズリ、胴下部は縦方向下から上へのヘラケズリ 口辺部ヨコナデ、胴部はヘラケズリの後、丁寧に ナデ。	内面に埋付着 回転実蓋 No.8、9、15、21、28、22、32 45、75	
13-2	土師小 形鉢	(11.4) 12.6 3.6	最大径は胴中段にある。 口辺部はゆるく開く。	外面 内面	口辺部ヨコナデ、胴部は上位で横、下位で斜位の ヘラケズリ、底部もヘラケズリ。 口辺部ヨコナデ、胴部ナデ。	回転実蓋 No.6	
13-3	土師 小形 甕	(10.8) (6.4)	口辺部はわずかに開き、胴部は そろばん底を呈する。	外面 内面	口辺部ヨコナデの後、胴部斜位ヘラケズリ。 口辺部ヨコナデ、胴部ナデ。	回転実蓋 No.6	
13-4	土師 器杯	— (3.7) (8.5)	底部は平底だが、やや丸味を帯 びる。	内外面	左回転クロコヨコナデ、底部は手持ちヘラケ ズリ。	酸化焼成 完全実蓋 No.26	
13-5	土師 器杯	— (2.7) (8.8)	底部は平底。	内外面 底部	右回転クロコヨコナデ。 手持ちヘラケズリ。	還元焼成 完全実蓋	

3) H3号住居址

遺構(第14図、図版七の1)

本住居址は、発掘区の北端西側のそ・た-4・5グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上においてD15号土塊と重複して検出された。本址はD15号土塊によって、北西コーナーの壁体を破壊されている。長軸の示す方向は、N-13°-Wである。平面形態は南北387cm、東西347cmの南北に長い長方形を呈し、東壁の中央部に方形の張り出し部を有する。

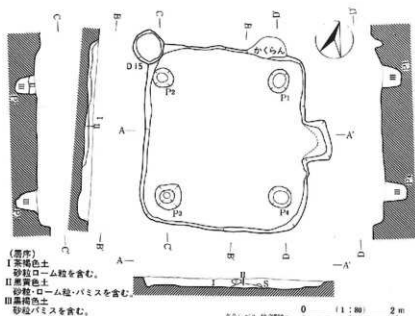
覆土は2層に分割された。Ⅰ層は、砂粒・ローム粒を含む茶褐色土、Ⅱ層はローム粒を多量に砂粒・パミス少量含む黒黄色土である。

確認面からの壁高は、10~23cmを測り、床面からは急傾斜で立ち上がる。壁体は黄褐色ローム層を利用して構築され、平滑で堅固な状態である。壁溝は検出されなかった。

床面は、平坦に掘り込まれた黄褐色ローム層上に、砂質の細かい黄色粒子と、黒色土を混ぜ合わせて、3~5mmの厚さで薄い貼床が施されている。全体的に平坦な面を形成しているが、ややもろい状態であった。

ピットは床面上から総数で4個検出され、いずれも支柱穴と考えられる。支柱穴P₁~P₄は、住居址の四隅に整然と配置されている。P₁は50×42cmの円形を呈し、深さは42cmを測る。P₂は40×44cmの円形を呈し、深さは42cmを測る。P₃は53×54cmの円形を呈し、深さは46cmを測る。P₄は44×51cmの円形を呈し、深さは41cmを測る。断面形は、いずれもU字状を呈し、覆土もP₂の上層部に住居址覆土第Ⅱ層の混入が見られる以外は、一様に、砂粒とパミスを含む黒褐色土が充填されていた。

東壁中央部の張り出し施設は、当初、カマドと誤認されたものである。東壁外を長さ56cm、巾80cmの方形状に、緩い傾斜で掘り込んで構築しており、底面には貼床が認められる。



第14図 H3号住居址・D15号土坑実測図及び遺物分布図

カマドの他、火処は全く認められなかった。

遺物の出土状況

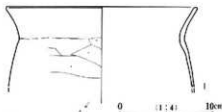
重機による表土除去作業中に第15図1の土師器甕の破片が検出された以外は、僅かに3点の土器片が出土したにすぎない。内訳は土師器甕の胴部破片1点、須恵器甕の口辺部片、胴部片が各1点である。

遺物 (第15図)

本住居址で図示できた遺物は土師器甕1点のみである。

土師器甕(15-1)は、最大径を口辺部に有する長胴甕で、外面調整は胴部上位に横方向のヘラケズリが施される。

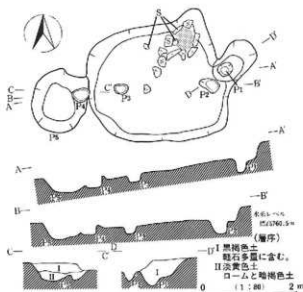
本址の所産は奈良～平安時代と考えられる。



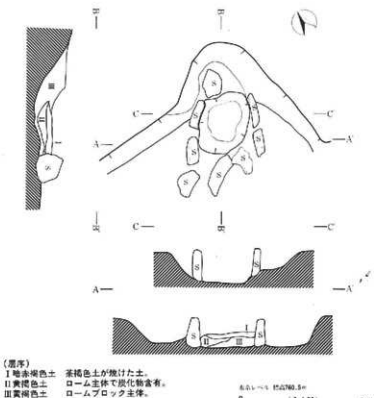
第15図 H3号住居址出土土器実測図

第5表 H3号住居址出土土器一覧表

検出番号	器種	数量	器形の特徴	調査	備考
15-1	土師器甕	20.4 (8.5)	最大径は口辺部にある。 口辺部は鋭く外反する。 胴部僅かに膨らむ。	外面 口辺部ヨコナデの後、胴上位は横方向にヘラケズリが施される。 内面 口辺部ヨコナデ、胴部はナデが施される。	覆付土 面転実測 フク土



第16図 H4号住居址実測図及び遺物分布図



第17図 H4号住居址カマド実測図

4) H4号住居址

遺構 (第16・17図、図版七の2、八の1)

本住居址は、発掘区の南東端む・め-16・17グリッド内に位置し、全体層序第III層の黄色ローム層上において検出された。主軸方向は、N-4°-Wを示している。

平面形態は南北250cm、東西300cmの丸味をおびた方形を呈しており、北東隅にカマドの突出部を有している。

覆土は、1層で構成され、黒褐色土が充填されていた。

確認面からの壁高は、15~26cmを測る。壁体は、黄褐色ローム層を利用して割合堅固に構築され、床面からはやや緩い角度で立ち上がる。

壁溝は、検出されなかった。

床面は、平坦に掘り込まれた黄色ローム層上に、砂粒と黒褐色土を混ぜ合わせた溝土を住居内の全面に薄く敷きつめた後、叩きしめられている。堅固で、

平坦な構築状態と言える。

ピットは、東西の両壁中央の壁ぎわから外壁にかけて大規模なものが各1個、同じく東西両壁中央の壁下の床面上から各1個、総数4個が検出されている。これらのピットはいずれも柱穴であったと考えられる。P₁は105×60cmの楕円形を呈し、深さは54cmを測る。断面形は、上半部で一段のテラスを有し、下半部ではU字状を呈する。覆土は軽石を多量に含む黒褐色土が充填されている。P₂は50×26cmの楕円形を呈し、深さは30cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。P₃は33×22cmの楕円形を呈し、深さは17cmを測る。断面形は、逆台形状を呈する。P₄は134×121cmの円形を呈し、東側に円形の掘り込みを有している。深さは39cmを測り、断面形は逆台形状を呈している。覆土は2層で構成され、上層はP₁と同様で、下層は、黄色ロームと、暗褐色土が混じりあった状態である。

カマド (第17図、図版八の1)

カマドは、北壁の東隅にあり、壁体を掘り込んで構成されている。焚口～煙道部までの長さは121cm、袖部の巾62cmの規模を有し、石材が多用される。煙道部は、北壁の壁体を長さ42cm、巾75cmの半円状の緩い傾斜で掘り込み、その直下の床面を48×39cmの不整円形状に掘り窪め、ローム主体の土を埋め没して、火床部を形成している。袖部には火床部の東西両側に各2個ずつ、直方体に割られた安山岩を配置している。天井・袖部に使用したと考えられる構築土は認められなかったが、火床部の前に散乱している礫は、これらに深い関連があったものと考えられる。

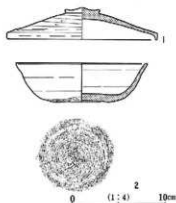
遺物の出土状態 (図版八の2)

指示不足によって本址は遺物の位置が記録できなかったため、カマド周辺を住居中央の床面直上に散布する状況が把握されたにすぎない。

遺物 (第18図、図版八の4～5)

本址からは、土師器片、須恵器片、馬骨片が出土している。

土師器片は図化できなかったが、器厚の薄い壺の胴部



第18図 H4号住居址出土土器実測図

第6表 H4号住居址出土土器一覧表

検出番号	所在地	法量	器形の特徴	調	整	備	考
18-1	遺物 跡	15.8 9.4 —	口辺部は大井部から冠かく下方に散在する。つまみは板室床縁を呈する履半左巻。	内外面	ロクロコナテ後、外面天井部上位に回転へラズリが施される。 つまみ接合。	回転実測 No.2	
18-2	遺物 器片	(13.9) 4.1 6.0	口辺部内筒気味に外傾し、高部で外反する。 底部平底。	内外面	ロクロコナテが施される。 底部は回転糸切りの後、履半部にへラズリが施される。	回転実測 No.1, 3	

破片が出土している。

須恵器の器種には、蓋・坏がある。蓋(18-1)は、口辺部が天井部から短く折れて直立し、つまみは擬宝珠様を呈する器形で、外面調整は、ロクロヨコナデののち、天井部上位に回転ヘラケズリが施される。坏(18-2)は、口辺部が内湾気味に立ち上がった後、端部で外反する器形で、外面調整は、ロクロヨコナデが施され、底面は回転糸切りののち、周辺部にヘラケズリが加えられる。

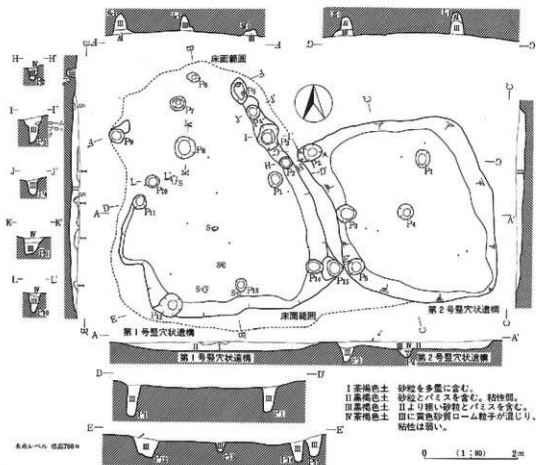
馬骨片は住居の中央の床面からやや浮いた状態で検出されている。

本住居址の所産期は奈良時代末から、平安時代初頭と考えられる。

(佐々木宗昭)

2 竪穴状遺構

1) 第1・2号竪穴状遺構



第19図 第1・2号竪穴状遺構実測図及び遺物分布図

遺構 (第19図、図版九の1・2)

第1・2号竪穴状遺構は、確認段階においてはそれぞれ別個の遺構と把握されたのであるが、調査が進行するに従って、両者の間に強い因果関係が認められるようになった。このため、ここでは、1・2号をまとめて記載することにしたい。

第1・2号竪穴状遺構は、発掘区の中央部つ・て・と-5・6グリッド内に位置し、全体層序第III層上から検出された。

第1号竪穴状遺構の平面形態は、南北568cm、東西417cmの不整な隅の丸い三角形を呈している。第2号竪穴状遺構は、南北394cm、東西315cmの平行四辺形を呈している。

覆土は、2層に分割されたが、第1・2号竪穴状遺構ともに大方は砂粒とバミスを含む黒褐色土(第II層)によって構成される。

確認面からの壁高は、1竪穴が0~15cm、2竪穴が5~14cmを測り、床面からはいずれも極めて緩やかに傾斜して立ち上がる。

床面はいずれも地山黄色ローム層はそのまま利用して、極めて堅固に叩きしめられている。総体的には平滑に構築されているが、住居中央に向って若干レベルが低下する傾向にある。また堅固な面は1竪穴の掘り込みの外や、1竪穴と2竪穴の境の部分にも認められる(第19図の破線を参照)。

ビットは1竪穴で15個、2竪穴で5個検出された。

1竪穴内のビットは、竪穴内の各所に広く存在するが、その配置に規則性は見い出せない。規模・形態は径43~55cm円形か楕円形を呈し、P₃を除いて32~66cmの深度を有する。断面形はU字状か、漏斗状を呈するものが多い。

2竪穴内のビットは、西側に偏在する傾向が看取される。規模・形態は径33~37cmの極めて画一的な円形を呈し、18~45cmの深度を有する。断面形はU字状を呈する。

火処は、1・2竪穴ともに認められなかった。

遺物の分布状態

1・2竪穴ともに遺物の出土は極めて少なく、第II層中に散漫に分布する程度である。

1竪穴からは総数の9点が出土した。内訳は須恵器8点、チャート1点で、須恵器は壺・甕などが多い。2竪穴からは総数7点が出土し、内訳は須恵器6点、自然礫1点である。須恵器はやはり、壺・甕類が多い。

遺物

いずれも細片であるため図示はしなかった。

1竪穴からは須恵器が出土しており、器種には、甕・長頸壺・坏などがある。甕には外面に平行叩き、格子叩きが施される胴部の細片があり、長頸壺は底部片である。坏は、ヘラケズリ調整

が施される底部片がある。

2 堅穴からも須恵器が出土しており、ロクロヨコナア調整が施される甕類と底部にヘラケズリ調整が施される坏片がある。

以上、1 堅穴と 2 堅穴の強い関連性は、覆土の状態や、床面が両者を結びつける壁外にまで広がっていることなどから認められている。従って、1・2 堅穴はそれぞれに別の掘り込みをもちながらも有機的につながりをもった 1 つの遺構であったと考えておきたい。(佐々木宗昭)

2) 第 3 号 堅穴状遺構

遺構 (第 20 図、図版十の 1)

本遺構は、発掘区の北端中央部に・に・ぬ-3・4 グリッド内に位置し、全体層序第 III 層上において検出された。遺構の中央西寄りの一部は、南北に走る溝状の攪乱によって既に破壊されていた。また、北・西壁は、表土削平時に失われている。

平面形態は、南北 341cm、東西 681cm の不整な長方形を呈している。

覆土は上層が砂粒とバミスを含む黒褐色土(第 I 層)、下層が I 層に黄色ローム粒子が混入する黒褐色土である。

確認面からの壁高は、0~16cm を測り、床面からは緩い傾斜で立ち上がる。壁体は、黄褐色ローム層を利用して構築されるが、蛇行が著しく、壁面も凹凸が多い。

壁溝は、東壁下から検出された。溝幅 24~56cm、深さ 3~12cm、全長 215cm を測り、断面は逆台形状を呈する。覆土は第 II 層が充填されていた。

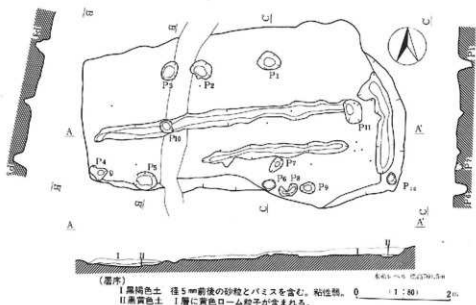
床面は、地山の黄褐色ローム層をそのまま利用して構築し、極めて堅固であるが凹凸が著しい状態である。

ピットは、遺構内の各所から合計 11 個検出された。P₁~P₃、P₄~P₉ が東西にほぼ直線上に存在するが、全体的には規則的な配置はみられない。形態は、やや不整な円形・楕円形を呈するもの (P₁~P₃・P₅・P₈・P₉~P₁₁) と歪みの激しい不整形のもの (P₄・P₆) がある。規模は円形・楕円形を呈するものが径 28cm~52cm、8cm~40cm の深度を有し、不整形を呈するものが径 35cm~43cm、32cm~40cm の深度を有する。

遺構内の長軸線上、及び南東部の床面上からは 2 条の溝状の掘り込みが検出されている。それぞれ、全長 534cm、巾 17~14cm、深さ 9~15cm、全長 314cm、巾 16~30cm、深さ 8~13cm を測り東西に直線上に伸びている。覆土は、第 II 層が充填されている。

遺物の出土状態

本遺構からは 18 点の遺物が出土した。内訳は須恵器 11 点、土師器 5 点、打製石斧 1 点、自然礫 1 点である。いずれも細片で、遺構南半の覆土第 I 層、床面上に散布する。



第20図 第3号竪穴状遺構実測図及び遺物分布図

本遺構からは、土師器片、須恵器片、石製品が出土した。

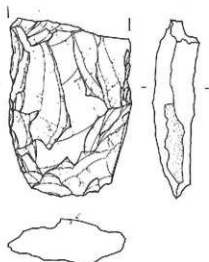
土師器の器種には甕があり、ヘラケズリが施される胴部の細片なので、図化はしなかった。

須恵器の器種には、甕・長頸瓶・壺などがある。甕は外面に平行叩きが施される細片で、長頸瓶は底部片である。壺は擬宝珠様を呈するつまみの細片、とかえりを有するもの(21-1)がある。

打製石斧は玄武岩製で短冊形を呈している。



第21図 第3号竪穴状遺構出土土器実測図



第22図 第3号竪穴状遺構出土土器実測図(1:2)

第7表 第3号竪穴状遺構出土土器一覧表

押図番号	器種	法量	器形の特徴	面	壁	備考
21-1	須恵器	(12.8) (1.1)	天井部は扁平に近く、内面天井部とは辺部の境に貼り付のかえりを有する。	内外面	ロクロ織ナデ。	図記実測 No.7.15

(小山岳夫)

3) 第4号竖穴状遺構

遺構(第23図、図版十の2)

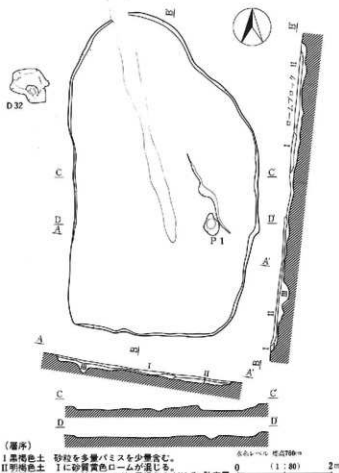
本遺構は発掘区の中央、にぬ-9~11グリッド内に位置し、全体層序第III層上から検出された。遺構の中央部には南北に溝状の攪乱が走っている。

平面形態は南北684cm、東西391cm北壁の形が崩れた長方形を呈している。

覆土は、2層に分割され、第I層が黒褐色土、第II層が明褐色土である。

確認面からの壁高は0~9cmを測り、床面からは縦く立ち上がる。壁体は黄褐色ローム層を利用して平滑に構築されている。

床面はほぼ全面に貼床が施



第23図 第4号竖穴状遺構・D32号土坑実測図

される。貼床は黄褐色ローム層上にロームと黒褐色土の混合土(第III層)を3~20cmの厚さに敷きつめて堅固に構築されている。ほぼ平坦ではあるが、東側に僅かに窪みを有する。掘り方は凹凸が著しい。

ピットは東側中央から1個検出された。P₁は47×37cmの不整形を呈し、6cmの深さを測る。

遺物の出土状態

本遺構から出土した遺物は総数で5点である。内訳は、土師器4点、須恵器1点で、遺構の南半部の床面上に散布する。

遺物 本遺構の遺物はヘラケズリの施される土師器甕の胴部片、平行叩きの施される須恵器甕の胴部の細片がある。

(佐々木宗昭)

4) 第6号竖穴状遺構

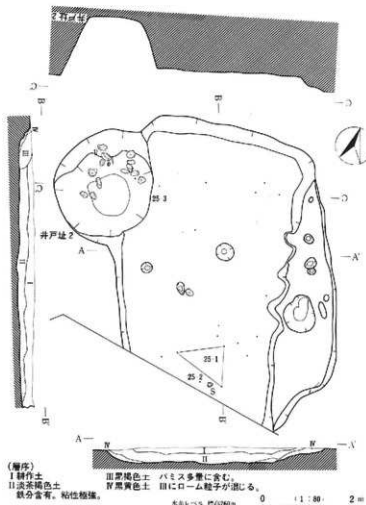
遺構 (第24図、図版十一の1)

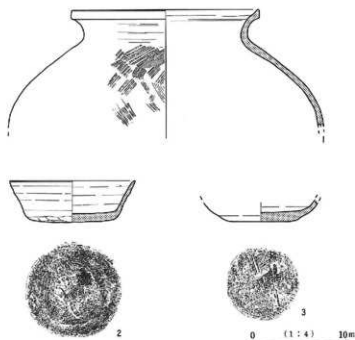
本遺構は、発掘区の南部中央に・ぬ-14~16グリッド内に位置し、第2号井戸趾に北西部を破壊されている。また、遺構南部は未調査である。

平面形態は、東西460cmを測り、南北に長い長方形を呈すると考えられる。

覆土は4層に分割され、プライマリーな埋没状態を示す。第I層は耕作土、第II層がレンズ状に堆積する淡茶褐色土、III層が黒褐色土、IV層はIII層にロームが混ざった土である。

確認面からの壁高は13~35cmを測り、床面からは極めて緩やかな傾斜で立ち上がる。また東壁





第25図 第6号竪穴状遺構出土土器実測図

第8表 第6号竪穴状遺構出土土器一覧表

検出 番号	器種	法種	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
25-1	須恵器 —	(19.6) (12.4)	口辺部強く広く外傾反し、端部は折返して強く直立する。	外面 口辺部ヨコナデの後、胴部は平行明きが羽状が施される。 内面 口辺部ヨコナデ、胴部ナデ。	図版実測 No19, 13, 17
25-2	須恵器 器片	13.4 4.4 9.5	口辺部はやや外傾気味底部は平坦だがやや丸味を帯びる。	内外面 ロクロヨコナデが施される。底部胴部へラ切りの後、手持ちへラケズリ。	図版実測 No18
25-3	須恵器 器片	— (1.5) 5.8	底部平坦。	内外面 ロクロヨコナデが施される。底部は手持ちへラケズリが施される。	No 3

は、一段のテラスを有する。壁体は黄褐色ローム層を利用して堅固である。

床面は、黄褐色ローム層をそのまま利用し、平坦で堅固である。

ピットは中央の床面上から3個検出され、径20~40cmの円形を呈し、4~12cmの深度を測る。

遺物の出土状態

遺物は総数で19点出土し、内訳は土師器15点、須恵器4点である。1点を除き、すべてが第II層からの出土であり、遺構の中央を除く南北両側に散布する傾斜がみられる。また、南側に分布する遺物は、完存品や大型破片が多い。

遺物（第24図、図版十一の3）

本遺構から出土した遺物には、土師器片、須恵器片がある。

土師器の器種には、甕があり、胴部にヘラケズリの施される細片がみられる。

須恵器の器種には、甕・長頸瓶・環がある。甕27-1は、球形胴部から口辺部が短く外反して短部で立ち上がる器形で、外面には平行叩きが交互に施される。長頸瓶は頸部片が出土している。環(27-2・3)は、口辺部が外反する2と底部片の3がある。27-2は、底部を回転ヘラ切りののちヘラケズリ調整が施され、3はヘラケズリ調整のみが観察される。

5) 第7号竪穴状遺構

遺構(第26図、図版十二の1)

本遺構は、発掘区の南側の遺構確認詳細トレンチの拡張部、に・ぬ-30・31グリッド内に位置している。北壁の一部はD89に、南壁の一部は溝状の攪乱によって破壊される。

平面形態は南北519cm、東西423cmの不整な楕円形を呈している。

覆土は大きく3層に分割された。第I層は砂主体の淡褐色土、第II層は黒褐色土、第III層はローム主体の黄褐色土である。

確認面からの壁高は、18~31cmを測り、壁体は黄褐色ローム層を利用して平滑に構築される。また、床面からはほぼ垂直に立ち上がる。

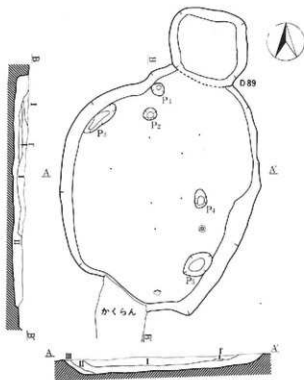
床面は、黄褐色ローム層をそのまま利用し、平坦で堅緻である。

ピットは4個検出され、径25~90cmの規模を有する。

遺物の出土状態

本遺構からは総数で8点の遺物が出土した。

内訳は、土師器2点、須恵器6点である。すべてが、遺構の中央、第II層中にあり、散漫な分布状態を示す。床面上から出土した遺物は、全くみられない。



(層序)

I 淡褐色土 II 黒褐色土

I 淡褐色土 III 黄褐色土

粗い砂層、

きめ細かい砂層、

パミスを含む、

ローム主体、

0 1 : 80 2m

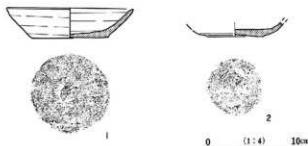
第26図 第7号竪穴状遺構・D89号土壌実測図及び遺物分布図

遺物（第27図、図版十一の4）

本遺構から出土した遺物は、土師器片、須恵器片がある。土師器は甕胴部の細片が出土している。

須恵器は甕・坏がある。甕には口辺部の端部が立ち上がる細片がある。坏には27-1・2がある。27-1は口辺部が割合大

きく外傾し、調整はロクロヨコナデが施される。底部は回転ヘラ切りの後、ヘラケズリが施される。27-2は底部破片で、ロクロヨコナデの後、底部は回転糸切りが施される。（小山岳夫）



第27図 第7号竪穴状遺構出土土器実測図

第9表 第7号竪穴状遺構出土土器一覧表

検出番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
27-1	須恵器 甕片	13.8 3.2 8.1	口辺部は割合大きく直線的に外傾する。	内外面 左回転ロクロヨコナデ。 底部外面回転ヘラ切りの後、粗かな手持ちヘラケズリが施される。	火手痕あり。 完全実測 No.1
27-2	須恵器 坏片	— (1.5) 3.8	底部はやや土成気味である。	内外面 ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りが施される。	火手痕あり。 完全実測 No.4, 5

6) 第8号竪穴状遺構

遺構（第28図、図版十二の2）

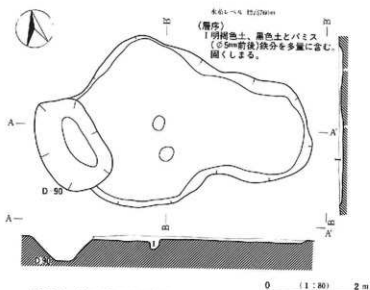
本遺構は、発掘区の南側、遺構確認詳細トレンチの拡張部、ぬ・ぬ・の-29・30グリッド内から、D90号土壌と重複して検出された。本遺構はD90号土壌に、西側の壁及び床面の一部を破壊されている。

平面形態は、南北338cm、東西515cmの東西に長い丸味を帯びた不定形で、あたかも円形が2つ重なり合うような形状を呈している。

覆土は1層で構成される。黒色土とバミス、鉄分を多量に含む地山に近い色調を呈する土で、かたくしまっている。

確認面からの壁高は、1~12cmを測り、南東側の壁残高は極めて低い。また、床面からは緩やかな傾斜で立ち上がる。壁体は、黄褐色・明紫色のローム層（地山）をそのまま利用して構築されているが、壁面は平滑でなくやや粗雑な構築状態である。また、やや軟弱なつくりでもある。

床面は、黄褐色・明紫色のローム層をそのまま利用して構築される。やや起伏のある構築状態であり、東から西へ向って5~6cmレベルを低下させている。



第28図 第8号竪穴状遺構・D90号土壌実測図

ピットは、検出されず、床面の中央に攪乱が2箇所みられた。

遺物の出土状態

本遺構から出土した遺物は、総数で3点のみである。すべてが須恵器で、遺構の東端部、西端部の床面上に散布している。

遺物

本遺構から検出された須恵器は、すべて細片ばかりであるので図化はできなかった。

須恵器の器種には、環がある。いずれもロクロヨコナデが施される口辺部中位の破片であり、自然釉が付着するものもある。

(佐々木宗昭)

以上、竪穴状遺構については、出土遺物に年代幅が大きすぎたり、遺物が非常に少ない遺構がみられたので、所産期の決定は避けた。この問題は、第V章で総合的に検討し、判断することにした。

3 溝状遺構

1) M1号溝状遺構

遺構 (第29図、図版十三の1)

本遺構は、発掘区の北端中央のつ・て・と-3グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層から検出された。D21・22・24・29・30号土壌に、南側の側壁を、D27に東側を破壊されている。

規模は、全周の推定850cm、巾15~44cm、深さ4~16cmを測り、東西にほぼ直線上に伸びている。

覆土は黒褐色土のみで構成される。

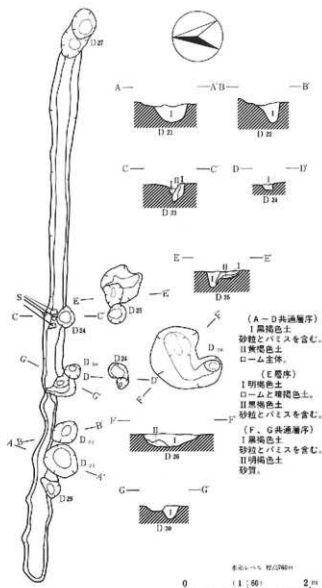
断面は、ほぼU字状を呈しているが、底面は凹凸が著しい。

遺物の出土状態

M1号溝状遺構からは全く遺物が出土していない。

従って、所産期も判然としない。

(小山岳夫)



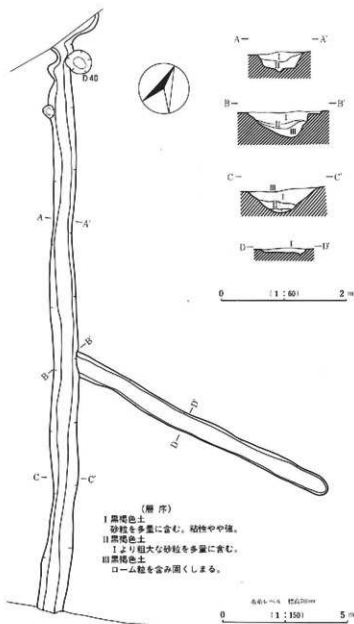
第29図 M1号溝状遺構・D21~D27・29・30号土壌実測図

2) M2号溝状遺構

遺構 (第30図、図版十三の2・3)

本遺構は発掘区の西側、お・か-7・8、か・き-9・10、き・く-11・12、く・け-13・14、と・く-7~11グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上から検出された。

検出長22m、巾73~107cm、深さ21~40cmを測り、北西、南東方向の未調査区へ向って更に長く伸びている。断面の形状は、開いたU字状を呈し、底面における南端部と北端部との比高差は、



第30図 M2号溝状遺構・D40号土壌突洞図

およそ20cm近く、南から北へ向って傾斜している。

また、中央南寄りの箇所から真東へ向って長さ10m70cm樹枝状に分かれている。

覆土は3層に分割された。第I層は砂粒を多量に含む黒褐色土で、第II層はI層よりも粗大な砂粒を含むようになる。第III層も黒褐色土で、ローム粒を含んで固くしまっている。

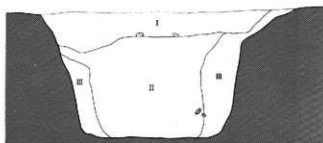
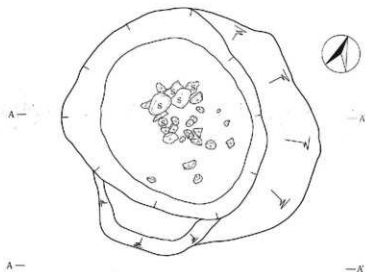
遺物の出土状態

遺物は総数で8点出土した。内訳は、土師器4点、須恵器4点である。溝内の各所、第I層中に散布している。

遺物

図示できる遺物は皆無である。土師器はヘラケズリの施される甕の胴部片、須恵器はクロコヨコナデの施される環と甕か瓶の小片が出土している。

(小山岳夫)



(層序) I 黒褐色土 径3-7mmのバミスを多量、径3mm前後の砂粒を少量含む粘性は弱い。
 II 黒色土 漆黒色に近く径0.7-1.5cmの礫を含む。粘性は極めて弱い。
 III 黒黄色土 IIにローム粒子が混じり粘性は弱い。

0 1:40 2m

第31図 第1号井戸址実測図及び層序分布図

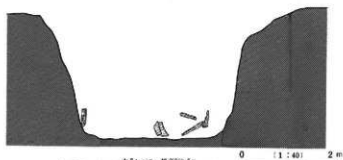
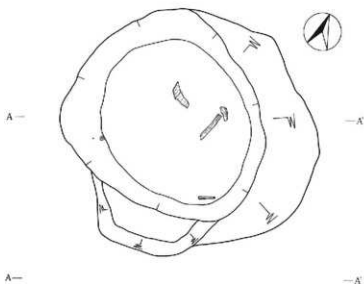
4 井戸址・土塙・ピット群・風倒木址

1) 第1号井戸址

遺構 (第31・32図、図版十三の4、5)

本址は、発掘区の中央東寄り、ぬ-8・9グリッド内に位置し、全体層序第III層上から検出された。

平面状態は、541×517cmの円形を呈し、東側と、南側にテラスを有する。深さは132cmを測り、断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦に近い。



第32図 第1号井戸趾木材・土器出土状況分布図

覆土は3層に分割された。第1層は、黒褐色土で多量の礫がこの層中から出土している。第II層が漆黒に近い黒色土、第III層がローム粒子が多量に混ざった黒黄色土である。

遺物の出土状態

本址から検出された遺物は総数8点である。内訳は縄文時代後期土器片1点、須恵器片1点、木材6点である。縄文土器・須恵器は第I層中の礫群とともに出土し、木材は底面近くの第II・III層の境にあたる箇所から、検出されている。

遺物（第39図）

縄文時代後期の土器は浅鉢の把手にあたる部分である。

須恵器は、ロクロヨコナデ調整される長頸壺の底部破片である。

（小山岳夫）

2) 第2号井戸址

遺構 (第24図、図版十一の1)

本遺構は、発掘区の南端中央、な・に-13・14 グリッド内に位置し、第6号竪穴状遺構を破壊している。

平面形態は231×212cmの円形を呈し、北側にテラスを有する。深さは、124cmを測り、断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平面である。

覆土は、掘り下げの際、土層観察用のベルトが崩壊したため、明らかではないが、最上層の黒褐色土層に多量の礫が含まれている。遺物はロクロヨコナデ調整の須恵器が1点出土した。

(佐々木宗昭)

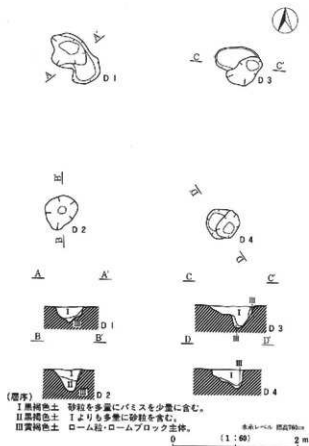
3) 土壌

遺構 (第33・34・35・36・37・38図、
図版十四の1~5、十五の1
~8、十六の1~8、十七の
1~6)

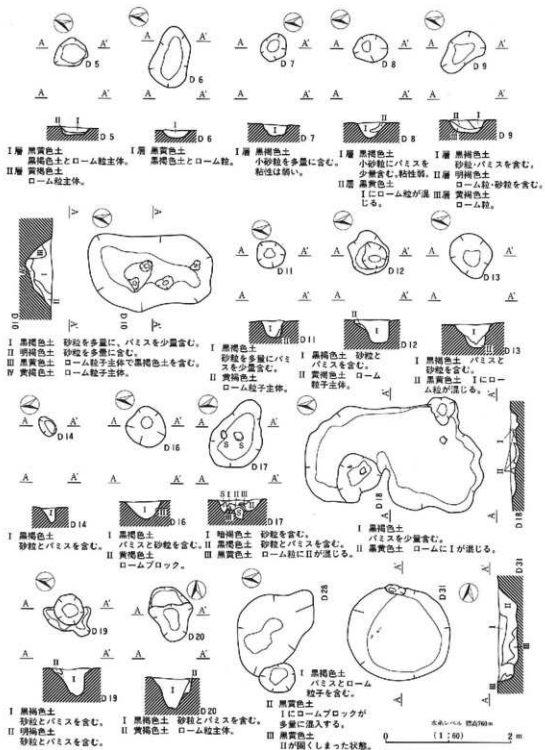
本遺跡から検出された土壌は、総数で90基を数える。これらの土壌は、発掘区の西側(D37~49)、及び、東側(D59~88)に偏する傾向があり、あたかも発掘区の中央部に占拠する住居址、竪穴状遺構、井戸址に分断されるようなあり方を示している。

従って、これらの土壌群は、住居群と有機的な関連をもって構成されたことは想起できるのであるが、何の目的で掘り込まれたものであるのかは明らかでない。また、D1~D4号土壌は掘立柱建物址とも考えられる。

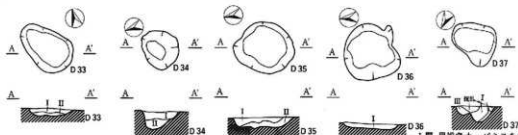
その他詳細は別表に記したい。



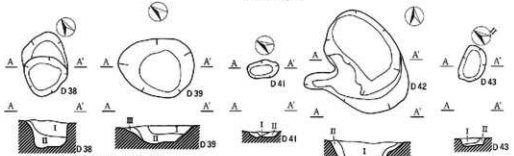
第33図 D1~D4号土壌実測図



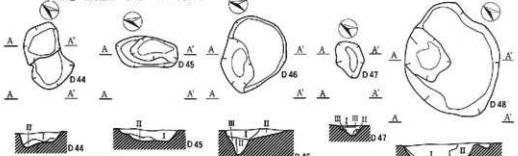
第34図 D5～D20・28・31号土質実測図



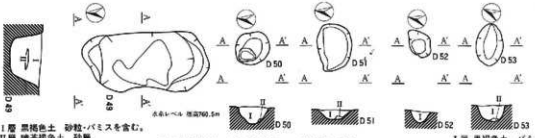
I層 黒褐色土 パミスを食む。 I層 黒褐色土 パミスを食む。 I層 黒褐色土 パミスを食む。 I層 黒褐色土 パミスを食む。 I層 黒褐色土 パミスを食む。
 II層 黄褐色土 ローム主体。 II層 黒黄色土 Iにロームが混じる。 II層 赤褐色土 パミスを食む。 II層 黒黄色土 Iにロームが混じる。 II層 黄褐色土 ローム主体。



D38, 39, 41, 42, 43 共通
 I層 黒褐色土 砂粒・パミスを食む。
 II層 黒褐色土 ローム粒を食む。
 III層 暗褐色土 砂粒・パミスを食む。



D44～D48 共通
 I層 黒褐色土 砂粒とパミスを食む。
 II層 黒褐色土 ローム粒を食む。
 III層 黄褐色土 ローム主体。



I層 黒褐色土 砂粒・パミスを食む。 I層 黒褐色土 パミスを食む。 D51, 52 共通 I層 黒褐色土 パミスを食む。
 II層 暗赤褐色土 砂層。 II層 黄褐色土 ロームブロック。 II層 暗褐色土 砂粒とパミスを食む。 II層 黄褐色土 ローム主体。 II層 黄褐色土 ローム主体。

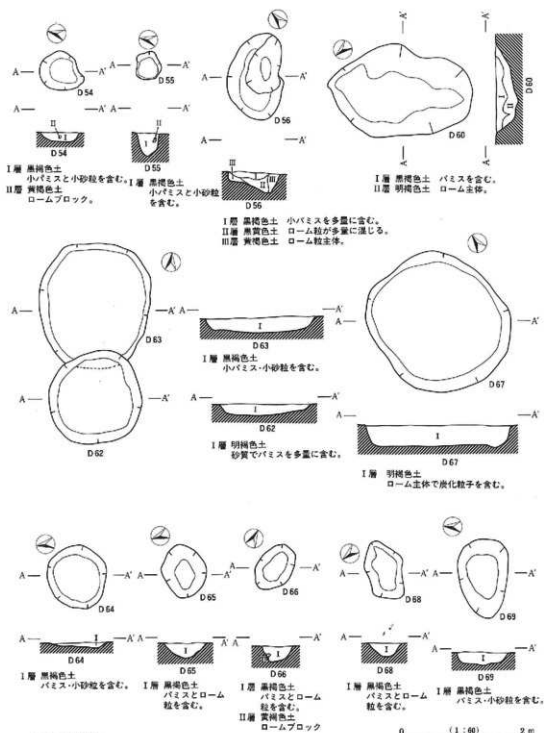
第35図 D33～D39・41～D53号土横実測図

第10表 土塙一覧表<1>

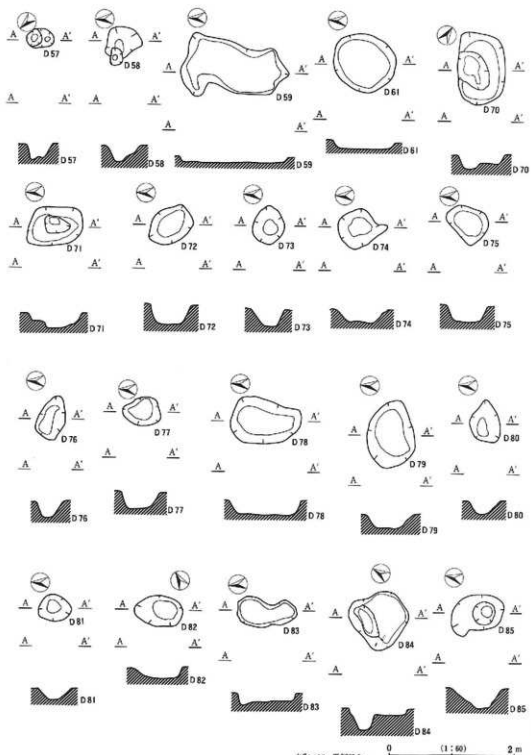
遺 構	平 面 プ ラ ン			長軸方位	断 面 形	深 さ	備 考
	形 態	長 径	短 径				
D 1	不整楕円形	94(cm)	41(cm)	N-55°-W	U 字 形	25(cm)	整然と並ぶ。
D 2	円 形	53	51	N-10°-E	U 字 形	35	
D 3	不整円形	76	60	N-80°-W	蓋斗状	37	
D 4	円 形	53	48	N-57°-W	不整台形	31	
D 5	円 形	55	44	N-56°-W	逆台形	12	
D 6	楕円形	97	62	N-88°-W	逆台形	11	
D 7	円 形	47	41	N-70°-W	逆台形	19	
D 8	円 形	54	43	N-1°-W	U 字 形	25	
D 9	不整楕円形	79	47	N-46°-W	逆台形	19	
D10	不整長方形	201	111	N-3°-W	半円形	44	
D11	円 形	45	43	N-74°-E	U 字 形	26	
D12	不整円形	68	61	N-81°-E	U 字 形	37	
D13	円 形	74	68	N-76°-E	U 字 形	38	
D14	円 形	34	24	N-66°-E	U 字 形	25	
D15	円 形	73	63	N-19°-W	逆台形	15	H 3 を破壊。
D16	円 形	64	62	N-67°-E	半円形	27	
D17	不整楕円形	117	77	N-40°-W	半円形	19	
D18	不 整 形	281	97	N-1°-E	不 整 形	15	底面凹凸著しい。
D19	不整円形	75	59	N-6°-W	蓋斗状	43	
D20	不整楕円形	89	68	N-11°-W	U 字 形	47	
D21	円 形	53	50	N-58°-E	逆台形	26	M 1 を破壊。
D22	楕円形	45	36	N-33°-W	U 字 形	33	"
D23	円 形	36	28	N-87°-W	U 字 形	28	"
D24	楕円形	45	22	N-63°-E	逆台形	14	
D25	不整円形	70	60	N-11°-W	蓋斗状	23	
D26	不整円形	121	53	N-44°-E	逆台形	21	
D27	長楕円形	82	42	N-64°-W	U 字 形	43	

第11表 土壌一覧表<2>

遺 構	平 面 プ ラ ン			長軸方位	断 面 形	深 さ	備 考
	形 態	長 径	短 径				
D28	不整楕円形	159	104	N-48°-W	逆台形	31	
D29	不整円形	39	27	N-32°-E	U字形	16	M1を破壊。
D30	不整形	57	35	N-55°-W	U字形	22	"
D31	円形	169	151	N-64°-W	逆台形	29	
D32	不整円形	89	61	N-46°-W	逆台形	14	
D33	楕円形	93	60	N-35°-W	逆台形	12	
D34	円形	64	58	N-48°-E	U字形	27	
D35	円形	99	82	N-10°-E	逆台形	16	
D36	円形	94	88	N-31°-E	逆台形	8	
D37	不整楕円形	73	50	N-60°-E	不整U字形	25	
D38	楕円形	103	76	N-38°-E	逆台形	42	
D39	楕円形	120	93	N-37°-W	逆台形	28	
D40	円形	43	36	N-77°-W	U字形	33	M2を破壊。
D41	長楕円形	50	28	N-37°-W	逆台形	8	
D42	楕円形	171	103	N-22°-W	逆台形	45	
D43	楕円形	58	28	N-71°-E	逆台形	12	
D44	不整楕円形	104	49	N-32°-E	逆台形	16	
D45	長楕円形	100	47	N-6°-E	逆台形	17	
D46	円形	124	98	N-83°-W	漏斗状	40	
D47	楕円形	60	34	N-40°-W	U字形	16	
D48	楕円形	186	153	N-34°-W	不整逆台形	45	
D49	不整長方形	206	88	N-5°-W	逆台形 ⁴	50	
D50	円形	58	53	N-50°-W	半円形	29	
D51	楕円形	77	54	N-2°-E	逆台形	15	
D52	楕円形	50	26	N-44°-E	U字形	17	
D53	楕円形	67	43	N-67°-E	U字形	26	
D54	不整円形	71	66	N-5°-E	逆台形	13	



第36図 D54～D56・60・62～D69号土坑実測図

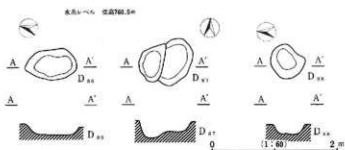


第37图 D57~D59·61·70~D85号土坑实测图

第12表 土壌一覽表<3>

(cm)

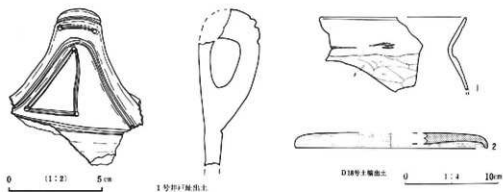
遺構	平 面 プ ラ ン			長軸方位	断面形	深 さ	備 考
	形 態	長 径	短 径				
D55	円 形	44	42	N-79°-E	U字形	38	
D56	不整楕円形	140	85	N-44°-E	逆台形	32	
D57	楕円形	43	32	N-43°-E	逆台形	23	
D58	不整円形	64	48	N-67°-W	逆台形	26	
D59	不整形	171	75	N-4°-E	逆台形	8	
D60	不整楕円形	230	125	N-52°-E	半円形	34	
D61	円 形	102	90	N-33°-E	逆台形	15	
D62	円 形	147	140	N-3°-W	逆台形	24	D63を破壊。
D63	円 形	(200)	178	N-3°-W	逆台形	18	D62に破壊される。
D64	円 形	103	94	N-79°-E	重 状	8	
D65	円 形	84	70	N-84°-W	半円形	24	
D66	楕円形	82	56	N-10°-E	逆台形	22	
D67	円 形	232	220	N-54°-W	逆台形	26	
D68	不整長方形	100	82	N-72°-W	逆台形	22	
D69	楕 形	126	80	N-83°-E	逆台形	21	
D70	楕円形	113	77	N-31°-W	逆台形	19	
D71	楕円形	97	62	N-38°-W	逆台形	24	
D72	楕円形	73	56	N-89°-E	逆台形	30	
D73	円 形	60	52	N-1°-E	逆台形	29	
D74	不整円形	79	66	N-23°-E	逆台形	20	
D75	不整楕円形	69	54	N-25°-E	逆台形	25	
D76	長楕円形	70	43	N-77°-W	U字形	27	
D77	不整円形	62	46	N-11°-E	逆台形	26	
D78	楕円形	112	68	N-0°-E	逆台形	22	
D79	楕円形	108	75	N-76°-W	逆台形	23	
D80	不整楕円形	69	46	N-73°-W	半円形	22	
D81	円 形	53	43	N-0°-E	逆台形	17	



第38図 D86～D88号土坑実測図

第13表 土坑一覽表<4>

遺構	平面プラン			長軸方位	断面形状	深さ	備考
	形状	長径	短径				
D82	卵形	77	48	N-61°-W	半円形	19	
D83	不整形	94	31	N-7°-W	逆台形	20	
D84	不整形	96	94	N-22°-W	漏斗状	34	
D85	楕円形	89	57	N-30°-W	逆台形	32	
D86	楕円形	82	48	N-13°-W	逆台形	13	
D87	楕円形	84	72	N-88°-W	逆台形	28	
D88	円形	65	46	N-51°-E	逆台形	16	
D89	隅丸方形	168	162	N-83°-W	逆台形	18	7号竪穴を破壊
D90	楕円形	202	134	N-16°-W	逆台形	55	8号竪穴を破壊



第39図 第1号井戸址・D18号土坑出土土器実測図

第14表 D18号土壌出土土器一覧表

検出 番号	器種	法量	器形の特徴	調査	整	備考
39-1	土師器 須恵器	(7.7)	口辺部は「く」の字状に外反し端部に一条の沈線を有する。	外面	群部ヘラケズリ(上縁部におさえ)の後、口辺部ヨコナデ。	部分実測 No2
39-2	須恵器 須恵器	(20.4) (1.6)	天井部は偏平で口辺部は短かく直立する。	内外面	クロロヨコナデの後、天井部上位に左ヘラケズリを施す。	図面実測 No13

遺物 (第39図)

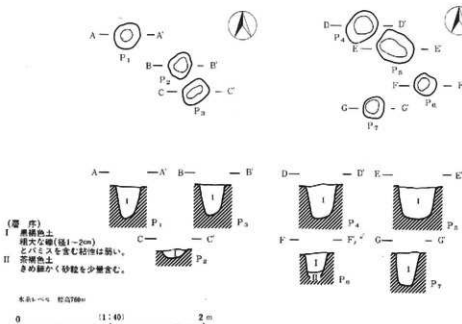
遺物が出土した土壌は、D18・26号土壌のみである。

D18号土壌からは土師器片・須恵器片が出土している。土師器の器種には甕(39-1)があり、口辺部は「く」の字状に外反し、端部に一条の沈線を有する。須恵器の器種には、蓋・環がある。蓋(18-2)は天井部で偏平で、口辺部は短く直立する。環は、口辺部中位のの小片で、図化はできなかった。

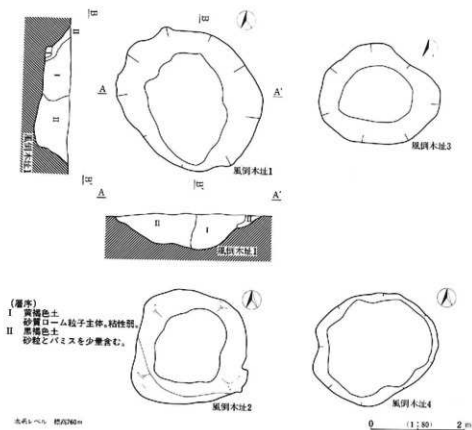
D27号土壌からは須恵器片が出土している。いずれも環の細片であり、図化はできなかった。

(小山岳夫)

4) ビット群



第40図 ビット群(P₁~P₇)実測図



第41図 第1-4号風倒木址実測図

遺構 (第40図、図版十七の7・8)

本遺構は、 $P_1 \sim P_3$ がマークグリッド内、 $P_4 \sim P_6$ がとー8・9グリッド内に位置している。規模は、径23~40cmの円形を呈し、 P_3 を除き、28~36cmのほぼ同様な深度を有する。覆土は大方が、黒褐色土 (I層) のみで構成され、 P_6 のみ底面近くに茶褐色土が堆積している。遺物は全く検出されていない。(小山岳夫)

5) 風倒木址

(図版十八の1・2)

風倒木址は4基検出された。第1号風倒木址は発掘区の北側中央西寄りのす・せー4・5グリッド内、第2号は中央西寄りのせ・そー10・11グリッド内、第3号は中央東寄りの、は・ひー10グリッド内、第4号が中央東寄りの・ぬー7・8グリッド内に位置している。いずれも径5m内外を測り、他の遺構と重複するものはみられない。(小山岳夫)

6) グリッド及び表採遺物

本遺跡のグリッド及び表採遺物には、弥生土器片、土師器片、須恵器片がある。

弥生土器には、赤色塗彩の施される高環の接合部の破片がある。

土師器の器種には、甕・環がある。甕はヘラケズリの施される胴部片・環は内面が黒色研磨される口～底部片がある。

須恵器の器種には、甕・長頸瓶・環がある。甕は端部が直立する口辺部片、平行叩きの施される胴部片がある。長頸瓶は胴部片、環はヘラケズリの施される底部片が出土している。

(小山岳夫)

V 総 括

鋳師屋から検出された遺構は、竪穴住居址4軒、竪穴状遺構7基、溝状遺構2基、井戸址2基、土壇90基、ピット7基、風倒木址4基である。

遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、馬骨などがあり、遺構に伴出する遺物は、土師器・須恵器が主体を占めた。

所産期については、竪穴住居址は奈良時代後半～平安時代初頭に求められたが、他の遺構に関しては、以下で考えることにしたい。

遺構

竪穴住居址は4軒とも奈良～平安時代初頭に位置づけられる。以下にその特徴を抽出したい。

住居址は4軒のうち、3軒がカマドを有する。H1・2号住居址は、カマドを北壁の中央部に有し、主柱穴を東・西両壁の中央部直下の床面上に各1個有する点で共通する。H4号住居址もカマドを北壁の東隅に有し、主柱穴を東・西両壁外に各1個有しており、H1・2と類似する形態の住居址と考えることができる。主柱穴のこのようなあり方は、御代田町の鋳師屋遺跡群中に所在する野火付遺跡や、小諸市宮ノ反遺跡の奈良～平安時代前期の住居址にもみられるものであり、該期の住居址の中で、特徴的な形態の一つと言えそうである。それに対して、本遺跡内では竪然と並ぶ4本の主柱穴をもつH3号住居址は、かえて特異な存在と言える。H3号住居址はカマドをもたず、東壁に張り出し部をもつことも特徴的であり、他にこのような類別はあまりみられない。尚、古墳時代後期(鬼高併行期)に当地方でも数多くみられる張り出しピットとは、明らかに異なるものである。

竪穴状遺構は、H1～3号の住居址群が占地する東側に存在する。形態は、三角形、平行四辺

形、長方形、楕円形など、様々であるが、いずれも不整なものであり、緻密に区画されて構築されたものとは考え難い。床面はいずれの遺構も平坦で割合堅固に構築されており、地山の黄褐色ローム層をそのまま利用するものと、貼床が施されるものがみられた。ピットは、柱穴と考えられるピットを有するもの（第1・2・3号竪穴状遺構）と保有しないもの（第4・6・7号竪穴状遺構）があり、保有するものも極めて不規則な配置であった。遺物は少なく、総数でも10点内外の検出状況で、須恵器の占める割合が高い。このように竪穴状遺構とは称したもののこれらの遺構の共通要素は、床面が堅緻でおおむね平坦であることと、火処がみられない点くらいであり、形状、ピットのあり方等はそれぞれに多種多用であった。

所産期については、第3・4号竪穴状遺構を除く遺構からは、本遺跡の住居址から出土している底部にヘラケズリの施される須恵器坏の細片がみられることから、住居址群の所産期とはほぼ同様の奈良時代末～平安時代初頭に位置づけられよう。また、第3号竪穴状遺構からは打製石斧や、かえりを有する須恵器の蓋など様々な時期の遺物が出土しているため、これらをもって本遺構の所産期を決定するのは難がある。遺構の位置関係から考えれば、他の竪穴状遺構と同時期と考えておくのが妥当と言えよう。遺物の僅少な第4号竪穴状遺構に関しても同様である。

性格については、住居址群と関連する何らかの施設であったことが想定されるが、根拠に乏しく、同様な資料の増加を待って再検討したい。

溝状遺構・井戸址・ピット群に関しても、遺物が乏しく、所産期を断定することはできないが、住居址・竪穴状遺構との相互の重複関係は少なく時間的な隔たりは、あまり大きくないと考えられる。

以上、鑄師屋遺跡の遺構は、ほとんどが近接した時期に構成されたものと考えられ、該期の集落構成を知る上で良好な資料となり得よう。詳細に関しては、今回の発掘区の北側の微高地（未調査区）の調査が行われた後に考えることにしたい。また、本遺跡の北側に位置する前田遺跡や南東に位置する同遺跡群中の野火付遺跡との関連も、その時に触れることとする。

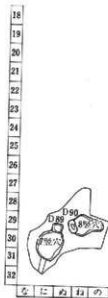
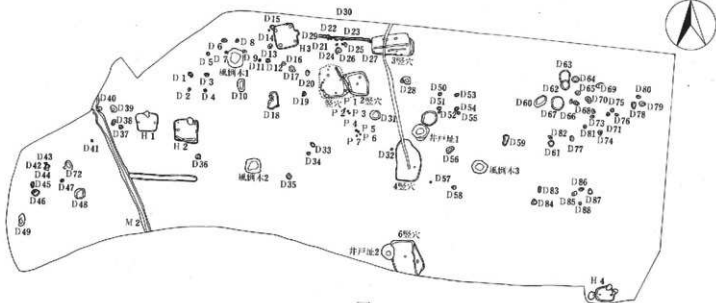
遺物

第15表 住居址一覧表

遺構	平 面 プ ラ ン				主軸方位	カマド	ピット	時 期	備 考
	形 態	東 西	南 北	面 積 (㎡)					
H 1	長 方 形	350	290	12.8	N-0°-E	北壁中央	主柱穴2個	奈~平	
H 2	方 形	392	362	13.2	N-2°-W	北壁東寄り	主柱穴2個 他 4個	奈~平	
H 3	長 方 形	347	387	13.2	N-13°-W	な し	主柱穴4個	奈~平	
H 4	方 形	250	300	5.8	N-4°-W	北壁東隅	主柱穴2個 他 2個	奈~平	

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17

あ い う え お か き く け こ さ し す せ た な に は ひ ふ へ ほ ち て ち せ の ひ び へ ば ば せ め も や ぢ



0 1:600 20m

第42図 興師屋遺跡全体図(1:600)

縄文時代の遺物は、井戸址出土の浅鉢の把手片と、第3号竪穴状遺構の打製石斧がある。浅鉢の把手片は縄文後期に比定される。尚、縄文時代の遺構は検出されていない。

弥生時代では、後期の高環の接合部片がグリッド遺物として出土している。本調査では遺構は検出されていないが、近隣に弥生時代の遺跡が存在することは、ほぼ確実となった。

奈良～平安時代の遺物は、土師器・須恵器、馬骨片がある。このうち、土師器・須恵器については、H1・2・4号住居址・第6・7号竪穴状遺構出土の資料を中心に検討を加えたい。

土師器の器種には、甕・小形甕がある。このうち甕は、最大径が口辺部と胴部中位にあり、口辺部はやや強く外反する。外面調整は、胴部上位で横方向、下位で縦方向のヘラズリが施されている。

須恵器の器種には、甕・蓋・坏がある。このうち蓋は、偏平な丸味をもつ天井部から口辺部は短く折れて直立し、つまみは擬宝珠様を呈するものと、偏平な天井部から口辺部は短く折れて直立するものがある。坏には、口辺部が内湾気味に開くものと僅かに外反するものがあり、底部は回転ヘラ切りののちヘラズリが施されるもの、丁寧なヘラズリが施されるものと回転糸切りののち、周辺部にヘラズリが施されるものがある。

本遺跡出土の土器群は、奈良時代と平安時代、両時代の特徴を見いだすことができる。特にH1号住居址では、奈良時代と考えられている底部が回転ヘラ切りか手持ちヘラズリが施される須恵器坏と、平安時代の特徴と考えられている回転糸切りの施される須恵器坏が共存しており、両時代が交錯する様相が顕著である。このため、本遺跡の土師器・須恵器を奈良時代後半～平安時代初頭のものとして位置づけるのであるが、器種構成の上からも不足の多い資料であるため、明確な時期決定は避けておきたい。

最後に、涌水の激しい困難な調査に携わって頂いた皆様に心より感謝します。

(小山岳夫)

引用参考文献

- 花岡 弘 1983 「第V章 総括 奈良時代の土器群について」〔曾根城遺跡〕 小諸市教育委員会
笹沢 浩 1976 「3 十二ノ后 4) まとめ ウ奈良・平安時代の土器について」〔長野県中央道
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一諏訪市その4-1〕 日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
田辺昭三 1981 『須恵器大成』 平凡社
佐久市教育委員会 1984 『若宮遺跡』

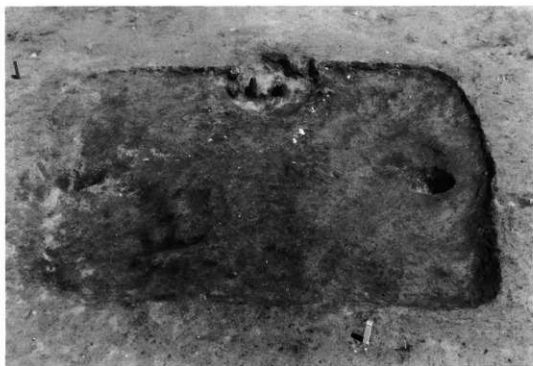
圖 版



鋳師屋遺跡の位置



1. H1号住居遺物出土状態



2. H1号住居址(南方から)



1. H1号住居址カマド



2. H1号住居址出土土器

9-1



9-3



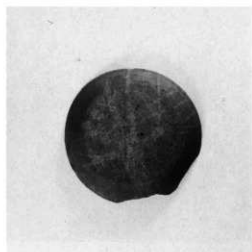
4. H1号住居址出土土器

9-4



5. H1号住居址出土土器

9-5

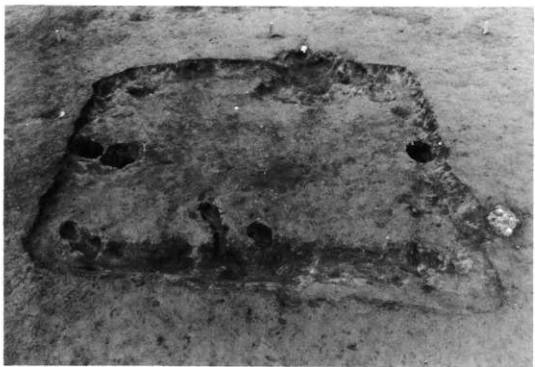


3. H1号住居址出土土器(墨書)

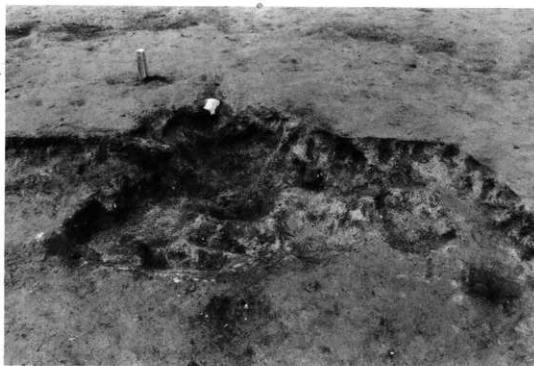
9-3



1. H2号住居址遺物出土状態



2. H2号住居址(南方より)



1. H2号住居址カマド



2. H2号住居址出土土器

13-1



3. H2号住居址出土土器

13-2



4. 調査スナップ



1. H3号住居址(西方より)



2. H4号住居址(北方より)



1. H4号住居址カマド



2. H4号住居址遺物出土状態



4. H4号住居址出土土器

10-1



3. H4号住居址遺物出土状態



5. H4号住居址出土土器

10-2



1. 第1号竖穴状遺構(南方より)



2. 第2号竖穴状遺構(南方より)



1. 第3号竖穴状遺構(南方より)



2. 第4号竖穴状遺構(南方より)



1. 第6号竖穴状遺構・第2号井戸址



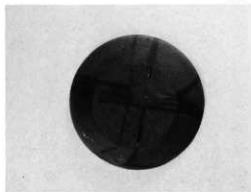
2. 第3号竖穴状遺構出土石器 22-1



3. 第6号竖穴状遺構出土土器 25-2



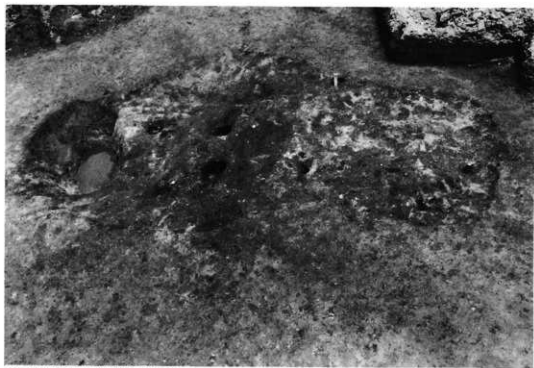
27-1



4. 第7号竖穴状遺構出土土器 27-1



1. 第7号竖穴状遺構(南方から)



2. 第8号竖穴状遺構(南方から)



1. M1号沟状遺構



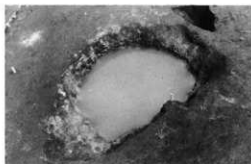
2. M2号沟状遺構



3. M2号溝状遺構



4. 第1号井戸址遺物出土状態



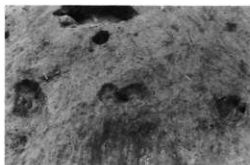
5. 第1号井戸址



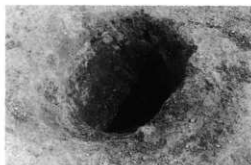
6. 第1号井戸址出土土器



1. D1~D4土壤(南方から)



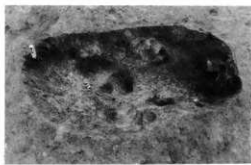
2. D5・7・9号土壤



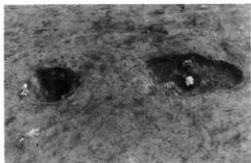
3. D8号土壤



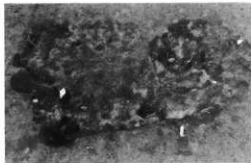
4. D10号土壤



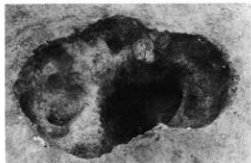
5. D11号土壤



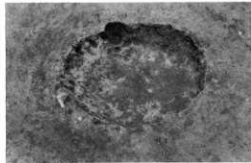
1. D16-17号土壤



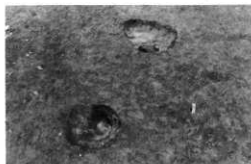
2. D18号土壤



3. D19号土壤



4. D31号土壤



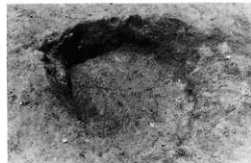
5. D33-34号土壤



6. D36号土壤



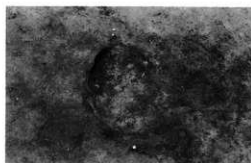
7. D38号土壤



8. D39号土壤



1. D40号土壤



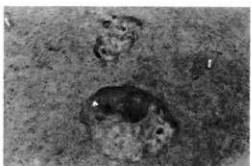
2. D41号土壤



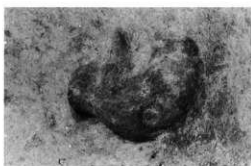
3. D42号土壤



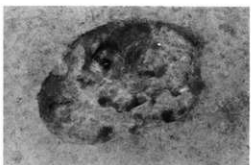
4. D43-44号土壤



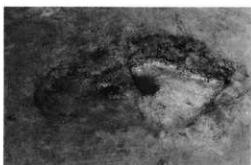
5. D45-46号土壤



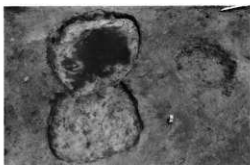
6. D47号土壤



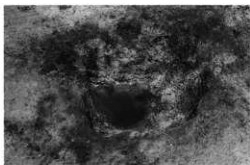
7. D48号土壤



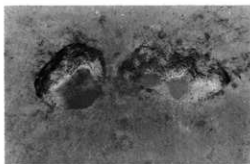
8. D60号土壤



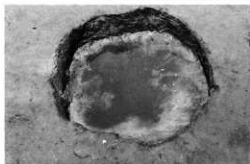
1. D62-63-64号土壤



2. D65号土壤



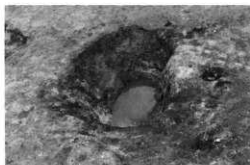
3. D66-68号土壤



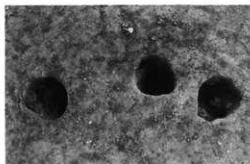
4. D67号土壤



5. D72-73号土壤



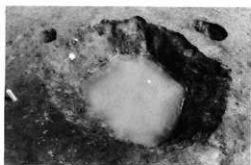
6. D89号土壤



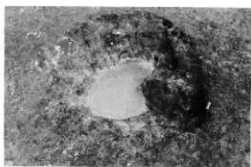
7. P₁~P₃ビット群



8. P₄~P₇ビット群



1. 第1号風倒木址



2. 第2号風倒木址



3. スナップ



4. スナップ

鑄師屋遺跡群

鑄師屋遺跡

長野県佐久市鑄師屋遺跡発掘調査報告書

昭和60年3月30日発行

編集者 鑄師屋遺跡発掘調査団

発行者 佐久市教育委員会

佐久市大字中込3056

電話0267-62-6121

印刷所 はおすき書籍株式会社